繪画考備手引

ホ 2
4779
5

門 ホ2
號 4779
巻 5

昭和十六年一月一日
尼野貴英氏贈

私記云源頼政矢柳末利郷者甲冑之間
に伊礼の矢孫也とし。なほ考へ

○美

こ　九月廿六日。ことしれたる。浪あて流る。
九月廿日。月十六日。ことと乃如。月土佐言。月はる。月サル猶。月ミよ。みもみ
ゑ山ゑ谷ゑ舟ゑくまゑ乃ゑ谷
ゑろの。なるなほれほ　こ　見ゑ。月伝紀。ゑゑ浮。ふゆゑ。月景子。九宝
十九ゑあきゝめく。月ゑ。ゑゑて。月ニ久ゑ付あ　こ　ゑゑゑ。方土佐乃江の浦ゑ
ゑゑることくあきゝ。ゑゑゑかれほ　こ　ちふうつセ見ゑちきこゑゑて
ちまこひむやも。月十七梅ハ花ゑもにゑゑれゑもいやけ。ゑくにちほゑこゑほし
。月ゑかゑのゑ乃ひゑりゑめん。月山ゑけつゑちゑぬこゑをゑれゑよゑりいゑれゑ
男ゑゑれと　こ　ゑゑゑしゑるをいふゑきゑ乃ゑれゑ。方土ゑこゑ。ゑこゑ。月
ゑふゑゑむ　風ゑやゑ山ゑゑゑ。ゑ法ゑくゑりゑゑけゑゑたゑゑこゑゑへゑ
ゑ里ゑゑゑ。ゑりゑゑゑにゑゑゑひゑゑちゑゑ
いやゑゑつゑゑゑゑかなほれゑゑ　こ　ゑかてゑ　ゑ食ゑ。方一山の谷ゑ
ゑ井ゑゑゑかゑてゑ

江藤文庫

秋風のいせのをとめらあひをつるかも。月十七 杉の戸のほむきえうりやきこうき
たちりけるをそなへしハも。月十六 ひしほ次よひるつき鈴て鋼もかもれるを
見せうちきのあつをの。月十九 こゝろ
わきもとかるこかつちとゝ
とをちて 以言字持し。方二ようゝ地乃むまつりえハをきかも思ふこと
かゝてたゝ〳〵まけうたや ゝそをちてかゝ〳〵。月八はゝ花乃つよのうちるるくさのことゝら
。古司 。日國司 れ三指ゝ ゝさ〳〵くる 人放ゝ。方一きゝくもさけむ山をゝろを
くる人目とり〳〵ゝとゝ。月三とひさくるやかゝちゝらのゝ〳〵きゝ沢てゝ。後紀ゝ家京
永久発時 詔曰朕大臣誰かかも我 諸比伝字年 就かかも我同比伝字年止ゝ。おゝて
ゝをやりゝのかゝりて 今見ゝ。方十七 ゝてゝこゝ花乃さゝりゝゝあひ
恨乃習をやるをり ゝ〳〵め ゝしめとゝ。月三 姉をゆんゝ恨おゝしめ
とゝ。月十ゝめゝ花ちりを
くゝまてゝゝ〳〵 ゝ〳〵かきゝのをちきると 後物語 截ゝ。方
五ゝちかきゝのをゝ〳〵きゝとゝ ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵。月 詞苦 月年七十有四 数奏
髪 沢白 節力 毛 嬴 不 祖 年 老 復 加 斯 病 診 曰 痛 疹 灌 沢 経 材 截 端 此 之 沢ゝ

ゝゝめ れゝゝ。方七 伝乃江のふ田かゝ次ゝいやゝかもなき
やつこあれゝ姓ゝゝゝゝゝゝ 志のゝゝをかる 旋ゝ ゝたま 以 課ゝ ゝん
。方五 ゝゝめゝゝゝゝゝまゝハ ゝて 喜ゝゝゝハ ゝゝゝゝたまゝ。月十
ゝゝまゝ沢けて。月 祇代 恩 軌 又 霊 。月 景 紀 皇 霊 之 威 。月 垂 仁 紀 外 盡
ゝちをゝゝづねな 欲 修 道ゝ。方十 ゝゝゝゝゝゝ

○月三まさあるを君をあてはこそ
ひろこひやまあっこたらはこそ　こぬひ 不見日 ○万十七
ぬひさまねこ　こやひたる
都雅に於ふり京先くを以 ○万五 梅の花笑えかさらくこやひる
花とあれとも酒こそ　風流士 風雅閑雅文人ふりをよ　こよへて
三世絶こ ○万九いにしへよ君ら三世へてつへ　こらむ 将見こ ○万五いさらをんらむ
けをわれはきこ八ちせまをさめ　見芸こ ○万九 ときこにいやえつ
てハ花こや　こらくしよしも　さく花ををりもをられもこらくしよし
えらこと　こるめちつのし ○万六 大さとひとのこるめえつらしさふるこ　こわこ
さこ浜きこうこやてこりふを
見浜こ ○万十三わこしのをきわりをここほり今やきま浜こ
こひてこうをる。於美まをくてこほきこのくまのつらこり
こ 飛こ ○万九 笑たくハちこうかさらむこけぬるつけのをこうもちら
むこをを次 ○月九 のう飛こふりれける 雲ををちこたこし ○月十五
わう少ふハ雲をふりこうこ ○月廿 谷こ ○万六 祢のここと ○月九
こうかたれかきるこうこ八ちる彼 ここと　たこのここと ○月九 乃ここと

○あるまここえこて
ゆすこりふなるへし　こさこの里 仕こ ○万七 こうこ川乃ふハしこうこさ
乃こさかりこらをまちをのここ　かりこふりはやしここも ○月九 ぎきこ
えのえちに花こちに花こ乃さうりふこりふ少しきこうかも　ころき 作蒙 ○万廿 葵の
花こりてこのふまをちひてまをを従ふここきこきてまをを ○月三
こうきてまをこる ○月四 あをう川こえこうきこしこゆくこ　こちを
乃守こ穿まをこふる ○万四 こちこりのここうむこてこをいひやこうむを
へをここれここちてつのつく。今和歌際の面こちこりてこ地名あり
そこちりをたる　こ　こ　こ

かつらをるるもの〻

にく 醜し。方言。あなにくさうらを次し酒のまて人をにくむいさるにかもにる。日神紀大醜此云鞍ふ

にたやし 耳不容易。方言。ゐ〻ゐ耳よこやにし次くたくもろろうちにわろ打くる。ほきけハ

やぶきやゝ 方言。

にまのこと 。後紀仁孝至了来美麻乃弥已止乃。天神孫ゐ

ちちらの大こやつ人あれセむやを

やこかこびと 都方人こ。方言。ふ乃枕れしまにまにもけふれハれとやこつ

らしこやこかとひと

こゆき 行幸こ。方言。あつさうつゝ引ゝ乃をゐにもさころこゆきをきあくしうも。日九ゐうこ行ハ

今こうしある

わうをふ 三神之祝こ。方言。うまさけうわのこふ乃ゐ山てら次

へしこゝもの

わうをふ 枕乃をこちらのちらまくをも。日ゐうまさけ

わのこふ乃ゐ山てらふ

こつら 角髪こ。上代乃男乃ゐうひて髪を

まて飛うきこにちゐくこき

たたへゐちてつゐてこくゐいかうれを

ゐうの〻。日神代天照太神乃れ髪をときてこつらまゝひこまつゝを。日神

百五十六

面紀香椎のうらにてれ髪をとゐて洗ふ入洗むひてうへこまつよこかこ自

らわゐるまくやてうをゆいて髪をしたまこをも偽乃まれらをを乃も

かをとなりたまゐ。日崇峻紀古俗年少兄年十五六間束髪於額十七八間分て

ゐ角子今と又紀とをこの角ま列こつら。十七八の間とをハやく後のゐ〻いとハ

ハをへてちゐやり。角まをあけまきとよ先ゐハ後ゐ。方言。角髪たたゐ角のごとく

ある為かくいゐ乃後世ひんつらこ〻ふハこつらを祇こ

こかつき 三月月こ。方言。ゐ乃さけて

。江次第座髪頻〻。和髪美豆良屈髪せ〻

こうつきこれハひゝあえし人の肩乃ゐ乃ゐ

なくこうつきわまゐぬうきけもくこひし居ゐあへるかも

こうき 霰こ。和霰

義倉礼。方言。ゐ乃ゐ乃ゐとまうせふきさこき

こなきらひ 女霧合こ。日本紀ゐ乃ゐ

雨やゐゐ北ゐを雨わもひゝ乃ゐれむ

川こなきらひ乃ゐくゐのあひゐもなくもれさほゐるかも。方言

こなきらひ男はうまに風をさこ舟をせかねつゐろハこゝへと

こなこふな 直次こ。方言。ほゝきこ次きなくさつきの乃こ

雪きこえまゐてこゝもの

こうよ 短歌こ。方言。しうよもひゝとゐ乃ゐハあゐ乃かねつも

こけつくて れ食國こ。方言。八隅〻ゐ乃大ゐ八こけくにハやまともをもれな

ゐうよ。日六れ乃つくにはくのこつきとこゝを乃。日八

えけくにはさうえむらめと
〜ぢ。古食國（ミケツクニ）〜

こくま 水隈〜。方土。さゝしゆのこくまうちけを
あまちくこかりのこかりてこられなむ

と

こうち 高井海〜。方五。かゝうちのらはあうしをこうちのこむ
けるとちていもう名のりつ。をはむちかはは山をこえて玖おこ
や

こさう 高坂〜。方サ。ふうくせちう衣はうめましをこさうたちらふ
いる山のこ
むけなり
まさやうよこむ。月廿。夜しろのこさうを西と。月廿あ

こさとのかみ 京兆〜。方六。はは乃わこひちうたちられい
からのこさう
たりてゝ
こさとのかにいてこうとへむ。和左京職兆

こさきわ 高廻〜。方四。こさきわのありうよられるはへ
多利乃美
佐止豆加佐
なこたてもはてもゆかとくるきみ

こし

ぬつき 多源付〜。方八。夜ぬにこしふくまてうあ〜田を川板つれたへま
を書くこう〜。夫木ふ〜ぬ中源田のさたへとる田ま八神もひとちら
こふつくらむ。新古今こふつきうを。山田ひとたへてきく神ぬつれ
社八来ヌ川。水源八赫土（ホニ）といへるうはちるへ〜〜ふもとろはうむ
ことなる〜〜。本朝時珍曰溝洫流水及川の灌田之次多有之
形状如池又如派色黄今甚脆裂〜。今山のちゝかもみちなり

こうのふ

広園生〜。方土。ちるはけちくくしあれハこうのふからあのの花乃ちこいてめ
やも。月十七。こうのふの百本のうめ乃ちる花のこと。催馬楽きり〜次のぬさうき
たさこうのふ
に〜〜
えのこと
乃ちか

こちのへ 体げ〜。方十七。こちのちゝくふつこかこ。たひ
もし〜ちうぬ君をめくこたまハた。和漢中古
乃之乃之乃之をおせよふこからしかひ
君ちこえぬけこう。月十七。ふりとも海ふく約ぶこちのへのゆさ
さうこ之乃ふる雨を。月サ乃のへ

こちのちぐて 道乃永〜。方四。ぬ
乃くまちちくまこちふまめのこ
ちはゆ乃こ〜〜。
もむ乃よふへ公へるこよひさへれをかへ次なこちのちゝてを。月五つねこ乃ぬ乃
乃ちゝてをくふくくというこうゆうむかりてはなゝ。月サ之花乃こゝかの星
に父をたきて道のちゝ道

こちゆきぐり 道約福〜。乃乃行ゆこうこ
はゆきかてぬかも
月〜〜乃ついてなるへ〜。方
土むほこの乃ゆきふりこたるこ次ふいもをおこてこふる次かも。古今
きこれハかりかへるちりこ〜き乃こちゆきこうにこ〜やつてき〜

こちのゆきあひて 道之行会〜。方四。むほこ乃乃のゆきあひこ天き乃ようのここワ
つ〜。月廿。むほこ乃乃よゆきあひてようめこもれハきこを

いつしう　こつを　水始こ。方十九　うの花をそこなう　こつこ
まくむ　たしらむるかも。俗ゝるの出て初てゝ日
こつぼを次かまるこ　水荏成僧有身こ。方廿こつ不ちんかれる飛ゝ
上洋起若西復益　方多かの多。ゝ洋の園なるをつふとゝ。古上　其あゝ之都夫多和
時謂都夫多和時魂こ。実方集このをこにいをまのあちつゝ〳〵いちてわ
ゆゝむ初りゝ八を。かけゝ日記ゝちつゝ里ゝこゝ乃こちけきをいゝてつゝ〳〵といい
ひしらゝるこのにゝかをこわりひうゝるこ。伊豆陸ま乳母之行生宮立とは忠
昔洋井堀命ゝ宮ゝ雄命競奇多更吉此辺下此海中其下由音稱云教布
教布云教布夫宮郎件祁疑水洋而乃怒接凡産而乃宮こ。日園大臣園江
水　上　書　我　命
こづ乃うへゝよかがをつかくで　きわづいのち　。方十こつ乃うゝよかはのく
數　如
むとゝけひつるかも。古ゝ乃ゝ乃ゝこかはゝらくゝかもゝゝ乃ゝ乃ゝ
八初りこぬ人をゝゝけを。ゝのくゝゝこゝ　こなつ乃洋　。方
こをわをゝをゝをゝき命をたくゝなゝのゝ乃ゝ乃ゝ初ゝひゝゝ。月十
こ乃川のゝ洋ゝうゝき初ゝ乃ゝをかへゝこゝうゝ初ゝひゝゝめてゝ

きのけらさへをけて。方十六月乃地さへ刻て嗚ゝゝも
ゝ舟きゝゝ場ゝ乃川乃こなきえに　わゝゝてひゝや君ゝあゝんゝして　こなぎた　水除　。方
きゝ乃ゝたくゝいこやこゝゝゝかも　こなうら　水ちこ。方十七きゝゝ洋ゝこゝ。
足占。日　洋井紀　吉方當ゝ下八十平方尾無ゝ　なゝゝゝこへてた。日三ゝ方石石石
朕西欲求財國若成革者河魚飲釣因心峯竿こ　造郡こ。日　洋切紀　こをひき　水脈引く
ゝゝけこをひきしゝ。月ゝこつきの舟ゝはゝりゝこをひきしゝ。和水脈船美平氏　。方十八はゝ乃
成紙布杯。式國使宜　某蕃王紀　中二隨ゝ　参上来ゝ　客ゝ参迎如登桜ゝ忠守
ゝ聞著氏水脈井　教導物敬参宣陸ゝ　迎姫　陵久登宜　凡太宰貢雜官物船
到縁ゝ玉澪引　令知伯玉こ。今官船乃さきにゝちてゝ初てこちひくゝこれ
こをりゝもゝへ。方廿ゝりにゝ乃ゝこをさうのゝゝ乃振のゝ乃こ。月九こを
たえゝ八こ。月十二　こをつくし　水沢衝石こ。方十二こをつゝしゝつゝてゝ初ゝへゝ
こをこやこゝかもゝ　もゝてゝもゝゝゝゝないゝもゝゝゝ元ゝ。月十四こをつ
あゝこいゝゝさ細ゝ乃ゝゝをつゝゝあれをゝゝのゝてあゝさゝゝゝゝのを。ゝさ月紀六日
こをつくゝ乃ゝをゝゝゝゝゝて雅ゝゝゝを為て川底こ入こ。患見集ゝ乃ゝまま

かぢをとりてこぎつゝ行とゝろ〳〵やさしてきつゝむ式雅俗は沢山中を
陰標若有集標杭者捜求抜去。顕昭古今注云こをつくゝとゝをゝ
にはかふきふるゝ末をたてゝこまろこをとゝ次きハろきをこてこをとゝ
とて舟をハのほりくだる。お拾集伝乃はけりえゝさせるこをつくゝ
ふきにまけぬ人はあらじな。六帖歌こをつくゝ川流もうゝ

こぎり 御心。万三 大阪乃

ほもかるこをつくゝたれかとをきこひもをるかね

こきり 万三。に寄亜てたいけるこをゝ

。和砂一名階美岐利。新令御階梵也こ

こたや 市田屋。万十三 神

たやのかきらゝとのこ。神代のときにつくる市田を守る屋。万葉集四月中こあ
老川かものこと 代田 ろ川こあて今こをゝ羊のかこをいのらむ。月卉和後拾遺
こをやとりけゝハ月こなりこけや

こをろ 御宮。万三 わくやとここ

いろけやさなへ花ひもころを老

をろををてこをろへは

いをひへををこをこをあ。こをとろ心も

こやはしら 家格。万六 こやはしら

神乃内室といへる名なるへし

ふとしきをさ。日仁徳紀つきねふ山こをゝ川を文

やをゝらふと

こやのほり 宝昇。日仁徳紀つきねふ山こをゝ川を文

しきまをもハ

のほりこ。万五 うちひさしく京へのぼりこと

たらちこ

こやで 文安。万久乃出入をり。万二 笑こをこにこをりこをこと

おほゝしく家出もをるこをひ乃懐田を。日六 室人乃こる

めをつゝこをこをこをこと

こやぢ 文政。万三 やつこらこをこるひるといをこ行

こ次乃こをこやて云りあり

こやさこ 内日。次文 和野鳩美佐古今按古用字かこをる三字脇屋心好在記也

波をりくにこ

山中亦食奥者也。日景行紀至上総玉穴後波波波

水門を叫尊笑賀声こ。万十三 こをこをこ

こやはしら

こをこをこをこをこをこをこをこをこ

こをこをこをこをこをこをこをこをこ

こをこをこをこをこをこをこをこをこ

とゝふをきゝて名ゝ花ゝいさゝくいむ　こづゝのをちゝいろぎし
枝をわりおりよひとゝふありやなしやと　万廿五　こくさ　水草なり
あをゝををゝあをゝあをゝいはゝよゝつゝよのなれいかくいてり
ゝとちさいうきにちゝをゝまゝのいをゝきるていまゝうくやき
○万三いにしへゝふるきつゝゝ年ふるき池のなきちゝゝをゝきゝけり　こつゝえ　瑞枝なり
○月十　吾されいゝくさゝゝゝ

くいたるいかるがひろ
たをこ乃葬地中に結る し〳〵むさ〳〵く 三宅了猶〻。万四一宅のえいもうむ
をひ一ねひををらををむ以ゐへ
くいつるいかりぬ。日三かつなき志を一ゆきに常乃れひをを宅むをふ〳〵くいつ此ハ
かりぬ。日九こを少葬をを市りふ〻〻きにこ。ち。遊仙日こ衣賓知こ葬綾
。男ひよ市を
たるをを〻 らつあひ乃いと 三合之糸〻。万四わつをるつあひよれる糸もち
てつけてまを今ろくやしき。日衣絶此石
漢國乃内侍家殯めの之後之綱 ミツヨリ
。出雲風土記 三身之綱市掛豆 こ
ミツヨリ
かさ 。日祈乃花 瓢風名記御笠陸風故時人
ミツヨリ
其宝日御笠也。式車持朝臣一人執蓋
葉〻。万土玉之〻ゆきよぬ〻るありまをけ〻。日三こなんひ笠にぬふてゆありま安
。日六待うてにわひる月いもうきるこ笠乃山よかをれ〻りけり。日八笠のこうさ武山
乃をこ
ちを〻 こ〻 たいこて 此 聾を者し。万三ちつう山こうたく〻てをを比あち
ミツヨリ
こを市る 此後之かぢ多くをを比ふるをを〻。日祈代あちをるやれをたありをのうをう
ををむのこ次をるのあるむえやこ日ふ玉男ふ小其頭所翌五石
自此後之覆〻。万十ふ〻むの
いぼう〻〻ひをやきもうぼう こてくら 佛帯者し。万三みてくらををち
ふりいて〻〻ち。和幣ミテクラ

古上此
幣帛 こ〻ら〻 此 執し手をこ〻をたまふうをを〻太乃ハえきたまふうの
ゆをこえををせこりふ衣ハきこまふよりをこけ一〻以
に日一。万一こ〻ら一のあつさ
乃ふのあうを次のあれこふをを

○む

むかへ 迎へ。言下きこうゆきけなくなりぬ山ふのむう〻をゆうむまつにハまし
一。万一乃ふ志ふてしさくふ此葬地のむ〻まあて山きこうきまさハ。ち。日八こうの志あ
むう〻舟こきつふ一あ乃かり〻にきわけとるハ。日八むう〻こぬもい むうふ
次 向伏〻。万三此をを乃たるり市乃ちをけ此むのこちあ。日こあををの
むうふ
むうぼ。こ。むかひて
こほきををりふたるへし むうさくる 向放し。むひて〻ほさるをを〻。日後代
紀からくにをいうまふこ〻ろうつらこきこる
むうさくるいき乃わこを
ををつふこきこ〻しる むうき むうハすほ一きこ〻ふこ〻えるへ一。万八白む
乃いぼう〻〻ひを手るむにひねこをむあま

はむらくもあるう。日神卯化 欽感。後紀天平勝宝元年 宣命 字年 於期義
こ。月其人の字 弟仁志 。霊異記 喜 。日本紀 元寿 紀いさをしくたし
きろのたむらさとてう

むきうち 向ちし。方八 おまのかいあひむきとて
わうてひしーあきまれなりひとき

まけ むけをひらげ 向手し。日神代 手をもむけとくちり。方五 かこ
なろくうた

むけ 庭こ。日神代 向 ムカフ 皇 庭 亞 。方一 ゆこの ゆついもむらにこは
むけにとこ

むし むさし 弟 もかも 和 ことをとめにて。月七 たくこ山のいそまてけむ
しかーこと思ふらこをいるよかもセむ。月三 妹う名いちちになるもむひめーこの小雲う
うまこてけむにまてに。月十三 神 なひのこむろの山よかくれさる 和 しきむやこけ

むし 紫在こ。方八 たつなくかこいの芦の根も

むしばき ころる 和 とひむ 次 ほれ なけき ワこ ぎお

むそびせむ 紫 ゆこ。方十三 ひむにひせむあいむ日まてに
。月十六 いきもちるも日ーんこむをひてー

むそびてちつ 掬而 呑こ。方七 いちーるとるこの
ちうをむにひてのこつ。古今 神ひちてむれひー

むる 共こ。方二 ゆこふる涙ところき
ありこほれるをまちうけゆの見やーこうん

。月三 次のむとをひくむもりかとひこ。月十五 風 りむとナセくるちこにいさり
をるー。月三 ふこれ 和 ころきこれたこしのむとかなりのくこりいきお

むしき 抱こ。方十四 かこつけりちうりまうむらかきもしきめれとあるぬをあ
とりあうせひ。月六 たひらけくわきハちうハむをもるきてわれハいまさむ

むせ 喝こ。方三 ゆきかこうるーあ りきえるこにんむセてなるこーちるる。月四
さうるへり神 和 るへきロをちうこてちにむさひ神のこーちうる。詩 人
如

むすこと 空こ。方十 むるこもれ中の名とつなー

むら 群こ。古上むら
噎

。むるーき言かて知のえをこしなハれこ
いちハーー。方十九 りやーのいさ むちけふ風のれとりかうけきこの火へりも。月十四
かこつけのおろのさ神むら。月六 むちよりのあさを行ハ。月十 夜こさ
にむら雨ふりて。月二 やまとにハむら山あれこ。月九 うちもれ。月一 ちらきセハ
こてろ。家称集きりーー次てるさやこハなきそれハむーきぬとるわれハき

むしばき きれ

むすーき 空こ。方三 世りちうハむふーきよとあむと
ろこ

。ろこのてるつきハこちうけーけ れ

むのーの ひと

昔人こ。方十 うつるゆくこきこ
かも。古今さつきまつ花をちうえ左の香かけハむーの人り社の香うこる

むつもとは 釈名に云、むつもとは国の境の山を言と定る。日本紀に云、むつ
もとあ一云ふとれとも山をまろあひ云あるく男きまれやとい。日本紀
にやとりハ平へしとしたへしあるを むなわけのひろき 胸脇之廣也。方九
むつもとしたひちりなくに むなわけのひろ
きわさもいし。楚辞 傍心停光 むなわけ 胸おし廣のむなにてをわけ行をいふ。方八さ
かりのもいぬる。塚石和家にうつるひぬへし をのむなわけのもとにてをわけ行をいふ。方八さ
さをしのむなわけのをる杖乃えきりら む祢ハわ巻て。方十三きてしより
物をわりへいわら
痛ハれてらけてとんなし。日ぬてひのねておりへのをの男ひまさけいしも
ハやむときもちし。日。夜のほとろ玉てくらくあまくひなれハわりもきもやうこと
日十九月のきれの雨乃山寄に むな祢うちちりげき 胸打数。方九む祢うちちりけ
けふきわりむ誰をてハやすむ きよにをくるわることをてつ
世の中 むつき 二月。方五むつきをちきをうちハかく
乃及 てろうををてをてたのしきをへめ むかつを 向寄也。日
皇極紀 むかつ

をとてるやらう柔和ころ。方七むろをとてるをの粉をりぬやしひやしきめ
くちろろろりろ。日白五りろかつの木ちつえりり花まついまにちけきつるかも
日九白寄の枝もをしまーよを むきえむこ海 友愛鈞。方十二うすせこし
日八寄白ひをつをしくひくしへいせぶ むきえむこまりのられ
とちほーららく男ひむつも。日四
くへうに麦をむこまりをつくにに むさゝひ 鼯鼠。方元むさゝひ。和名抄
あひよけるかも。日六まりらをりを国山にせめれい男ようりくるむさひろうれ
自注下 日七 二國山木めれをまに むさゝひりちまろこれれまちやセむ。本草自
注歌久俗曰年侯し姐。和鼯鼠毛義 俗云無佐ゝ比。本草山中にてをくををーー。兼名
花云代如猿而肉翼似蝙蝠肉細尾頂 飛後高而下不能復下
云鼯鼠にあ狐似蝙蝠肉細尾頂 翼毛紫赤色背上茶艾色脇下黄豚頭雑白
脚短爪長尾三尺許飛且乳亦得之 飛生声如人呼食火烟能従高而下不能復下
上 むなぎ 鱣也。和名抄東木黄魚鮎に在頷下者也。日六ろまろはりはよのき
今 をれ及やとにくーーふろうろむろきりりめセ。日やちくもいけ
らいあーむををくやけくむ形き
をとるとかとにちりつな む一 出也。方三乃代をーーのーくあ
こむとにはせにくりまもはれいちりた

むくら 蕪し方いらたかむやき にらいをむくらのけらしきやとに入まさし火
むの日土 ねりと人こもりたちとハ定むくらけひとる屋に珠しらすしを
○日九 むくらをいやしきやとも天皇のすさむしてハむしらまし を和名抄毛久良
時珍曰二月生苗莖有細刺葉對節生一葉五尖微似蓖麻葉而有細齒八九月開細小花
成穗結子 むくひまつ 徒松 松校 有回皇子自傷結松枝歌二首 いとしらす
加黄蘇子 をりむにひまさきくあいまさきくあいまさかりしむ。皇子尊者天皇之兄子也 書紀天皇元年
にあしくるつこしよりて十九年にして紀の温湯に行幸したまふ
時松をむにひて祈まく向ひあををとたまへり日長足寸 麦者蘇以足徒松哀咽作
歌いまとろ乃地中よりてるむ次ひまつとろもとけ次いにけ〳〵ねりほやし
むろのき 夫木 香樹又極方ニ やもろのいろのむろのみしもとにあ
殊ハ方 ゆらえぬるも。日六むをとかりこかまろむろの本とをつめ
をとをかきとりむとめ。和樫一名 名 雅樫 行 名 雅 翼 天之將雨樫先
知之 又 柏香 ねらしろるて天木香樹をかきてむろといへるおや
むらさき ほそし方土 むらさきハ所さしよりつとをいちのハ十のちまとにあへる
まやをれ。和紫草 無良散久。式 紫草 紫草廿斤 酢二升 灰二石

いとをに桔乃灰さんをくーとに次ちるへーー。後於造紫工ーー 染る後乃え
ないけにれひさんにるものにろ有ける。原本実有 灰ちひときはをとりまふ〳〵異ひ
ろ乃 むのはき 行縢 釈名云行縢天加波波行騰 言裹脚可以跳踏行也
けむ 也。清理菜類 赤茅 在股邪幅在下也 邪幅偏也邪塗干足
加今行縢 和名抄東胫在股下也 ○日六 ○方十六 ○方土 ○方土
にをてこうつろりにむうえきかけてやにめこのきみ むーろ 房之 むほこ
乃ろちはきつれいをむーろーきてを君をこむ〳〵もかも。日七
ふ次乃ち根ろるものこけむーろ られりけひとてぬきちーー むーふ次
はる 蕊 食之。古土むしあれまにろ にてやうとたくふ次まさやくとてに染方乃ろ
はやるむ。ーい。方四 む ふ次まなこやうとてにいめーれ 妹ーーー

ゑゑ 感じ。日本代紀 情愛 方言 ゑゑや笑うこと。日十九 ゑゑとしたまたな
。日五めこゑゑゑゑうつ。日九けしのこはめゑゑも尽なこと
もとうむな。日十七んゑゑゑゑも
なーゑ。日十七ん。うかるくめゑ

ゑさきーくは 目醒様。方言 あるつきの
ゑさきーくさとゑれを
たゑゑてあまーてゑれとゑぬりセ。こひ
くさかゑらくさゑゑくさこゑゑふ日し

ゑさけをゑを 祝 方言 物
。方言五

あるめーのゑとゑとりて喜さらハ
なーゑのこやこへゑさけたまり

めーー 目ゐし。方言 ゑーたゑ
まえむとこいちお。日十八ゑーと
きふらし。日十めーたまひあきらめたまひこ。日十八うひくわをゑれらあやふ
えふきとわをゑれらめやこ。ひむーのたきのこかゑさをらとときのつもけふ
も笑れこ

めセ 食。方言十六 ゑまゑよれゑの申ゑやセにーとふよのうむる
ゑもなーめセ。日八けうためわりよもそまに喜乃ゑよぬけるつえ取
ゑゑーて
こえまセ

ゑつる 愛。日本紀 花ゑ
てにわり ゑつるこら。方言 ゑつらーき人をわきくよ信のにの
きーのえにふもにむーもかも。ゑくくゑ愛ゑる 新 時て 希めこゑもなり
にゑりまれなる。ゑのゑつまゑゑ又祝ゑまゑゑゑるも特なり。日本紀 希見此

ゑつゑーー。日本紀 こゑひのゑりかゑれ
けふ。古今 ゑつゑーき人をこむくやゑゑ
ゑゑくらし 回。方言 白浪をいまめゑゑ
てかくやこひむを居りめをほり。方言 ゑちゑ
ゑくふにまゑまきへいまんきゑ目を
乃林めききのさめえきの衣ゑくちん目に
目ゑーゑ人乃あまこあれハわゑられぬら
神ぬきかにれ四日 居風こやこをゑほゑり
いえゑりゑりゑーゑ ゑほハ流ゑけるかも。日
もかゑらんいさ行てこむ。日四 ゑ乃女乃ゑ
女乃つゑる小花こゑ 神乃流乃こなわ
乃いとをゑりかへーかゑ糸に雑有こえむ
セハ大わ女乃ひきくゑにりをつゑゑ
川ゑこ乃ゑゑふゑん

めーー 目。日本紀 花ゑ
てにわり ゑつるこら。方言 ゑつらーき人をわきくよ信のにの
きーのえにふもにむーもかも。ゑくくゑ愛ゑる 新 時て 希めこゑもなり
にゑりまれなる。ゑのゑつまゑゑ又祝ゑまゑゑゑるも特なり。日本紀 希見此

めーー 女。方言 たを
やめ乃

ゑのと 乳母。日本代 豊乃姫 覚 乳母 別 他 あ
伝 其 女 子 を 依 姫 持 養 児 為 寓 乃 茅 乃 義

たるへし。和名抄に師說女乃乳止言書妹也唐式云皇子乳母皇孫乳母
采乃止母云云成云孀女知乳毛今按即乳母也。倉成長恩如母故曰乳母云云

め乃加

し　女神云。万九男乃神也ゆゑ　たま
ひ女の神をちなひ　ひとまひてゝし　めろ。日神代いしかはかふちかとふちなあし
ゝしろい卵なる　もろもろ　めろよりよりもろ
て　海藻云。万三寸乃あまい軍布荊　ほやきいとまなくしくけ
布木采俗用和布。はゝ藻ハ　ろをゝ　ともちなくに。日七海藻。和海藻味甘鹹寒毒
ひろゝ。文選云海苔はゝ藻云

○毛

え　助語云。万七川青苔也。日六ゝらくしも。日十七ゝれゝもむも　え。もゝあ
。日かめ　も。日十四かゝ　ゝつ。日けらも。ゝかいゝれほ　しき
てをりゝ　藻云。万十五ゝあくゆゝむゝゆきのあきのゝもゝ。日たひよてもをな
くゝもやゝとわきもまゝて。日十ゝもちのくゝをちくゝをあゝむをゝし。伊女のさゝろく
かちけんゝんある　乃をゝとゝ　よゝて出多のゝゝゆゝのけさん　欲得云ゝとゝ
出てゆく　乃ゝ　ぬきゝれゝけれをへきなくちりぬへきゝれ　とか　欲得云ゝとゝ
ゝ　乃ゝとゝ　ゝ日は

。日下　ゝれゝ　ゝ　ゝけゝ　ゝ　ゝ　

たゝひ。ゆ。ゑ。に。い。ほ。せ。まれら
をゝのゑまきもゝゝゝもれ。ゆ。ゑ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

ほり 徘徊。日神武紀いくひ。ゝゝゝ

乃とゝえて
もをれこ　とろむき　諸向こ。万十四むさしのゝ笑いとろむきかゝのくも天
たこゝろこへむ　うまにまにわれいりにーを。笑ハ四よちひきてかか
かゝえりゝ　とろゝ　備こ。万廿うろゝいさけくとまをしかつりくまてに
。後花安多智說者ゝ。仏足石ゐ人乃九いえかくあれハ
つりのゝあのすれゝ　ちれつゝあもろゝ　とゝつひと　本人こ。万十とろ人ほゝきこをやたつら
ーほとゝさにをりゝを人ゝいるおいをろ人ゝりゝいへるてゝ。後拾遺人ゝ
ちゝちゝゝほとゝきにたるひのほうまちゝいうからむ。源氏ゆ来れ猫よもあきと
ゝけりゝりいゝらけて人ゝてゝゐてえつけ　ものへ　物部こ。餞速日命之裔
ゝまへうゝ。花ちかゝまろひゝもな　こ。万三物部乃たしのこと
けをい大ゝのうちさーの　とゝ　ちうに股長こ足を伸ていめゝをゝ人。古上
まにきゝといふよのう　ゝ　ちにいをさむをゝ　うち
ゝこ。万四むゝこたまいさつけてかつゝもれとわきいさふりぬむ。日三山えいけと
ーありゝもちゝ妹ゝのりゝらむこめを人ゝゝめやも。日　八ろの名を大こめをとれ
ひゝちゝ　へり　寄郎こ。万大やきこちをゝゝしのやきにあにゝりくゝりへやり
てゝゝ　へ君をゝめむ。日十七とちゝちりへををゝてゝこ。日六

大ゝのさうひゝきまゝこ山ゝりゝ所ゝやま　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
。日八ちゝ門ゝ松ハをゝれハきゝ。日十三ひゝゝ乃寺山ゝ。日沼寺地寺　ゝ　。万三
ふーゝ乃嶽ゝ。ゝりれゝ。あいこな月乃ゝ　ゝちにけめれいろの夜ふりけと。万二ゝち
つきりたゝもーけむゝ。日ゝちきゝりゝやゝたつちーゝゝゝ。日月東西ゝゐ稍乃
茅　ゝへや海　石室山ゝ家室もかゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　。万五ゝへやまこえてゐゆきゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝりてゝてふゝろゝハ入ゝといゝにやもゝこゝいゝちゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
。日十七ゝろゝハ火ゝさへゝゝえつてゝりひこひゝ。日ふゝゐゝ杭の光ゝ　ゝ　。万二
ーろをゝりゝゝへゝハろ乃ゝちつゝりゝにゝゝゝ物乃ゝけくて年経へゝるを
乃ちれハゝの乃けなゝゝに物やーちゝへーー。万二ちゝきゝゝ乃ゝとりにゝりを
あいのれゝもりゝ大ゝいたゝひゝゝしゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
。日七きゝりゝてむゝちゝて乃神社ゝ　唐土こ。万二ゝろゝゝ　乃ゝほきゝゝいふゝ
ゝさ　ゝろさや　二室こ。古下たきへゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
きゝこ　きゝ下ふへゝゝゝちに。万四人ゝゝを方けくや君を二銷乃ゝへをゝ
をゝ、ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝを　ゝに乃ゝはがゝき　百合ゐの芝張こ。万十ゝきゝれハゝれゝゝゝゝゝゝ
ゝくきゝ乃ゝゝに乃ゝれハゝやゝむ君ゝあゝり

公。和鵜一名鸕鷀。俗伝伊弉伯尊毛髮一名鸕鷀。葦垣きたい。葦の枝小ちを返て
葦乃間を通るをいふ。歌略云葦垣ゆ[illegible]
築陵是日有鹿知郎中走之入役手之中而仆死時異甚怪此時異疫
即召古多自手出之死去因視耳中蟲咬割剥故名甚多日百六十耳

糸 ぬちとり 綉多く。方五世の中かくろくとりうらくろかてらい
とよい。きぬ。日三かこつ松ちりかけい。和綉毛糸 熟蠶
いるせい。細葉を育大蚕
こ波をたきてちんず

おきへゆきへゆきゆゆゆきゆ ふーつうぶな 藤伏拔鉢之手一つほ〜あるも
にふしてをふなをいへり。意
ちちをちーれるかあーつふる ぬ〜ちどり 百千をしれけくゆるをんこ又
〜ちちりーと。方十六日かとの

板の葉とりむむ〜ちちりちーりはられて君は来ませぬ。日六〜とり
乃こあーちつりきいと。日十七鈴うりまいほつとりて少のうちーりふと
て ぬ〜ちち 黄ぬ〜。ぬとつーもぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ。方七枝山をぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

きしこうこあれいちひきしあつた。日三振干のうつりあまえのくさ[illegible]
むかるらむいき行てしむ。日二川をうしくなりいひしこ。日十おきつこを花
うちを

ゆみ。日廣神化國極人著火恢性あ上條名曰毛添　本朝食徒日山東人補
て　　生鮭投熱湯剥皮。和茲醋以食之林眼摩勝こ。宋書有恢性
勝。花史左編云石陳人好恢性元有延命一期あ上條こ

うりもむ　寄物こ
。方十六つり

。西陽雜俎云人好恢性あ上條名曰詐襲子

かゝの核の実こりをむこちちり　　裏こ。方十五枝森之匂へつりもめれぬとも
ちこりハくれと君ハ来まこぬ　　君ちこうのつちこと月てい。日廿三の
をうつこちけかきちて。

ふこう　裏裏こ。方十五あきたきにくへうにも
こ。日かセりむこようセくるなこにいまり

。日一ひちのをうこ姫こてんら
をるあまをこめらうのをろぬきぬ。日五まつかハの

ゆひ　和琴
毛止由比

ハせをやしくれちねのをのをろめれてあるうつくらへ
。組東駄こい。方二つちこゆひひちてめれけき。源きりつほ

ひ　埃こ。日
お見紀む

いつきなきわりゆひよりきよをちきくんへむにひこめつや
うひこあちこへこりこい。日景行紀　冷水。古下酌陸奥之こ泉一破大臣ものセ
。式に水刻於毛比。侯姫世紀に水刻於毛比。和主水毛比止量。催こ菓子あ多ものや

とりハきへ　陸もよ　こ　こ　ひ　きもむ　こ　きまこ　ひ　こ　こ。栗塵坊こ　こ　ひ
ハこちり。松こ子こ　こ　ひ　こ　こ　こ

や　あとにとゝをゝ人てきく　てにたゝこ。万九　あゝりほに人もあれやもめれきぬを乱
にやらふとひりたる　に。人もあれやものもいかゝあれやかきとゝへてきくちり
下のおゝとゝおゝ。月七ゝこゝりにいきつゝあまりゝ川の淵ゝ人もいをめやも
。月八いまゝこゝろを学にわりへらハまちさく花ゝつちにたちやも。月三まゝゝをゝ
わゝへゝりわやゝらくきのゝつ　や　疑　みあゝ。万九かりつ仏神ゝひ川ゝかけゝえて今や暁らん
きかゝへゝよゝりゝゝのゝたむ　み坂の花。月ほゝくきんあきゝふ秋乃枝風ふかきさ
きあゝわやゝを　や　助詞。万二わゝもやあんゝえゝりゝ百人のえゝてゝまゝゝふやにゝみ
ゝりゝりき　えゝり。雑波のやをにのやふゝんのやゝゝをゝひゝりゝかゝへ
やさゝ　弥尺ゝ。万四たきゝまゝもをかものゝゝろやさゝゝりいきつく緒をたきてゝゝも
。月十三　やさゝ乃あゝけきゝゝ。長大島ゝてゝけゝくをゝゝゝゝゝゝゝいきなゝき
ゝのゆゝをゝ
とへてゝゝり　やきもちらぬかも。万七をゝこゝり喜乃大飛をやゝゝ人ゝやゝ
乃ゝちゝてをゝゝゝゝぬやき　ちゝらぬゝもゝゝゝろやゝ。月十三男ゝゆゝ
ゆゝゝさむ天乃ゝゝもかも　や　和ゝ。万五むゝまの井川ゝよ家いあ
ゝ。月ゝのゝふゝゝゝゝやゝゝゝゝゝゝ　やさゝ　きてゝ男をやゝゝゝゝあゝゝゝゝゝあ
むも人きゝやゝゝかゝゝゝゝ。源ゝまゝ人ゝゝゝて振あゝたゝん
ゝに。竹ゝゝ振きのゝけゝゝかゝのゝゝゝゝゝゝゝ

日上。万五三八ら〇くもよけくたちまるやう

やくしかきちつくほかり〇。日七 **やる** 遣ス遣問ちり。万三よるひる

にあるさうめやと。日十書乃地ところやらむと ひとふとこ酒のてそうをやる

むりつちきりけふくれにもあるぬう **やる** 遣使ス。万十うあり花え

ちうけむる阿使やらハ。日十ちろさハおそ三くくよ思へとし仕をやらむきへり

さらおく。日十二たりなる仕をあくしとろをそ つりひとやりー花ス尺きや

日廿ちろりく生もつひと人ハへと

いへつとやらむちつき三れし **やへちゆさく** 。万十六にりひりうちセ

くし申 主花さくやと花さ

たやきね **やのら** 親族ス。万三阿さくるやうのうちきえにてりあり来

まりてて。日九やらしいよりあつまりい。侯後紀法乃

族をて。眷属（十ウ） **やせ** 痩ス。万二大舟のちつりとまりのちやしひよあとひやセ

親属（日）骨属（日） ぬ人乃ゆあに。日四 ちろ人ハ死るるみ御川下

ちわれやれ月ス日にけよ。日十三 **やつこ** 奴ス。万七住のえの小田かられこいやらもな

いとにてひ日にけスやセぬて きやつこれと縛うるめよ出ぬひとを

かる。日十六ちくさにもかよもちきもやつことろれいあり乃るめりるくに。日十三

まひらをりさときんととハちー 点乃ちてスわれ三ハぬへー。日十三 香めれると

ふにるよりり乃川ちーりるるふち

ち先るいさき先やちて。日十点数 **やて** 八年男ス。万九やてセこ乃かとれひ

ミの り阿由。日十三年のやてセをきるか

いい **やちほこ** 素肌ス。万二やえけとちらをつきてちち乃へぬあハい。心れ松記

ミ先に 守護乃神子入礼奉る後に 衣和殺ス。ス土松入ス。催ス

楽要川のきーりやり日やちらかにい **やまとめ** 大和女ス。万十四うちりさにミやりつうセハやちちや

乃ひさまくてとにあちらはちちち

やはびと 仙人ス又山人ス。万九 詠仙人形ちこしへよえをりけやかちろもれえ

ちーー次山ろ行人。日廿あ一川乃山ス行しかた山人乃われえ

ちーーやまちーろれ。日あ一川乃山ス行げし **やまさんひと** 山ス人ス。万十四

山人乃ちろもちー次やまひとやちちー あーひきス

山さえ人乃ひさえにまなしりふちうあやにかちーー。ちのちきをに山ーらい又

やまほしちちーいうもちちの きちち。日十三 人さちえちてにあれちい。日六ーほや

くし人ス。 **やはのみちら** 母之阿乎ス。日神代千時 八十万神今会れ天 あ行き

さんちるい。 。万十天乃ちあり行ちえさしまりて神のつちハ叫

ちーちなに **やちほこのかみ** 八千矛之神ス大汝ちる七ちち之一せ。古上やちほこの神

ちーちハやーまくにつまきうのてちほ

うりのくにの。方六八
ちほこの神のまます。

やはつ〜 山神。日神代山神ともいふ。方一山つ〜
ろ〜ろ〜つきとまへるハ花ざかりのもの

やはゆき 山雪。方十うゑぬちろ〜〜山雪のいちろ

やまにんち 周五人感
〜〜こひいもち名ひ〜ろ〜むのも

。方四てれる日をやしにてめ〜てちくおうと衣ぬ〜つ月に人ちに。月一このこと
をきくことにやちらんさけ使てれる月枝もやしにのこも。月五やしにやはう三てあむ

やはぐに 八國園。古上八一まくにつまきうゆてほ〜〜こうのくうく
〜〜ちをあり〜きうてう。方六やまの中まむハ〜もさえうあ
まてい〜。大八学宗ハ
ちゆをゆむを以ゑ

やーろ 社。方十ろのちちいたやーろのそこちもも
たやふるかもの中ろの中くひき
ひ〜ゆもを見をかけぬ日ろ〜

やはとまき 山をく。方十山〜ほき空〜一有
はきを〜かおつ〜〜こあつたも
〜くと

やまちらく 山近。方十ちつきろ高山ちく家ぬ〜てつきておくらん
あるう 学乃こを。古今〜ゆへちく家ぬ〜〜れいうひひの
ちくあるこをハ

やまし 山中。方十あ〜ひきの山四〜ろるひてひ
ゆく〜ちく

やはゆ

百七十三

ふもうし 山うし。方六山ともうしの中小学ときつ
たきのかもちハ天まてあるぬうも

やはちすこ 山学。方六本
常山やまちく

これハ石代ゆかりへうら
次大ろやてろう

やはつろ 山方。古上やまろこにまきしろろつさ〜
。日仁位紀 山ろにまけうちちもも〜

まのかひ 山峡。古下山乃かひまちきうゆる度ひろくりかし。方十七山のかひ
ろうこもろくれをろ〜ひもきのゆもけふと雪乃ぬまては。和
峡山間陝ちせ山乃加比。猿山のかひまさけ〜〜ろ之わひしら
にまし〜ちちくきうにち鬼の山乃かひあるけふやはあ〜ぬ

やはさら 山坂。方
ものし

ひきの山坂ろえてあまさか
うひあにろろりなく

やまろげ 山鉾。方十吾されハきのこのくれの月枝ハほつるしも山けはし
て。月三〜〜れちる高の河乃川よりに鳴ろ雪ちる山けにして

やはのかろかげ 山之宇伝。方八ろの石漱のそりのほ〜き次人もも
かけに。方十あ〜ひきの山のろけにちく高の声
かぬち山乃〜かけ

きうしやも 山熊。方一山〜乃鹿を吠しミぬろ北ちに家ちり鉢を
山をらんこ

やまろ〜 山熊。方一山〜乃鹿を吠しミぬひつ。月十ゆきて見て高てろ立〜き鹿高方

山うるわきて
いねつてぬ、も　やはるにうえ　山谷狭く。言七あ〜川の山谷こえてやつらさに
いうやちくらむ〜〜ひまのりてもの

やまゆき　山行く。方十三山ゆき地　ゆきのつ〜白川と〜　やまのね　山之牛。方十六あさの山彩さ〜
人ゆる山のうりあさくいくを

つりおちを　やはてらの次　山聟し。方八うまきけうらのうらう山　やまひこ　山彦
ちく〜に　うらは秋八うとちちりちらまくをも　。方
やうひとのうこ〜へむきたち〜。い。月八山
ひこ〜ふあ〜。月十山彦のうふるまてに　やはのうつく　山之七ヤ。方二豆ひまのやま
めわぬ山　うらつ〜に　やはねろしのかゼ　山風。方九山ねろーの風ふふきうとこ〜　やま
。月八やまーたうせにちりこうはちゆめ

もこかほ〜　山と人欲し。方六やまうれい山もうほ　やまのうき　山之退。
里うれいさとも山のきと
まりをふちちし。方六山の　やもせ　山も狭。方八山もせに　やま　山嶺。
うきせのうきうふ〜〜　うけるあ〜ひの〜　。方三いも
とてうふのつ〜〜ひつやまいうこうこ三けくちりにけるかい　や　屋。方十四しうろ
三屋ちにつうり　齋をいふ。敬舎　慈孝之室曰齋〜

ふさにつちこよりうせをやりていえふけうこ。月九くも　やけ　煙。日神怒焦
えしやちもちう〜ゆまうちらひゆく　君をいうつこひて　をまうちうこ
しきうこうこう大やけをき吉日のわれうをこ〜
。方九こうひうこのこやけのこうにさこ　むふ〜〜　やうこ　屋形。方十六うめやう
けつこう。今俗く　た黄染乃やうこ沖の
舟やうこ〜〜　やとり　旅舎。方十五いこうのあきーまぬるやとりれ
る君。日〜うきまうちうこひやとりやれいうへれほし
て。月十五大きこのしことかこしし大、みの　やどあけまけて　屋戸冨設而。方
ゆきうるに〜やうり次すかも　四ゆふまれうやと
あけまけてつまきこむ爰よれうこうこむこ
ふ人を。遊仙今青室閑戸爰東向渠生　やとかさ次　屋戸不備。方二
きけるをやとかされうれをかへうりをうのこやひを。月七是　やね　屋根しやむ
川の山ゆきうらしやとかうふ蛙こちまちてやーかさむうも　ねの四方
。方四　板ふきの足ものやねい山ちうしねの。〜りてとてまねうをむ
。月十五うき板もてふける板まのあいさうい山ちうぬるけ〜
うふし。方十七やうこをうあう大足よ白めうりの沈よりつけて〜。月十九天那屋のう
をねうをもこうーませにかーぬ月うへうける。月やうこをのまーうう

ちくうとやとにて面かきあてえんてかくくくくも。六帳やくとをろまーろ
ろ脇を川きて見ろしゆきにあいせつるかも。神牛抄やくとをとハ夏ろ株の
やくるさくりふに　やつけ　ハもしほ馬ハ足をいく。日　枝葉ハやまのめろこーまし
きろくるをりくく　ゆるにひくゆらくの馬のやつけハをーけくくなし

やはどり　山雞し。万八あーひきの山とりのさくるわをろ永くーー歌をひとりかも
日土　あーひきの山とりの尾のさくるわをろ永くーー歌をひとりかも
れむ。地理志云山雞取め家雞雄沢雌亟者也。和山雞一名鷄鷄
夜万止利。性如志云山雞め美毛自愛其色終日映水目眩刎溺死

やーちく　傷　拷く

。古下やーちくろ
たきかくくくくー

やめぎ　柳し矢之毛のおちるーー弐兵庫楽遣策柳笛然
日採軟取強好ーー。万七やめきころきれハもえきれ

やなぎのまゆ　柳眉し。万十ろやとの柳の眉ーーなるかも　やはぢさ
。日十九ち物のほろき眉根をなるまゆ

山萬草し。万七山ちさの花ろろ男　やはるちぢぬ　山萬草。とりふやふかくーーとり
ろろろひぬくん。ちの多ろも出　。万日山ちちくるのとみあて
ーー。日サけのろのなるあへてるあ

やまのぬ　山萬草し萬草よ萬くるさーー萬ちる
ーーしひきのこもちくなをくー　ーー大書令の山ろ夜又萬ち文萬附

百七十五

乃旅人も山あるまりし。万九やとの山のあてまれるきぬまて。六帳

山ろし沢又せくとる山萬草とてたれる夜のあつらーーちきし　やはふき　。和
をやはふきしせるハ花し歌をハてのつわるてやまふきるあ花。万八かろ鳴神方川立報
入えて今ろさくらむやまふきの花。日十花さきて実ハちらぬてなるきけえたろほ
ちるかもやまふきの花。日かくーあハなるて雖けん山ふきろやむとまとなくこひくれるへハ
。日蛙よ似るくれくるーーあわろろ　地ーーの山ふきくれろたをりー。日九ちけ山乃谷
へろ行ある　やはさけ　ちる門ををりしまたるをりーーの又たるーーの山よせるちけるをりふろ。和麥
山ふきをろ　門冬　夜志夜サ。或説和名の訓たるとくし。万十三ーー地の
ちるろ乃山ろちくしをるる山ちけのはの乃神ちろろくーーちぶ。日四山ちけの乃ろ多ぬてくをつ
ちるよりいくちーー君ハくれくろあん。日七いもくるあ芝のくーーろゆくワれを山ろ
ちくーーひて日日くらーーつ。日土山ちけのやまれてきくを念ちくー
。日十二山川のあ伝ろちる山芝のくーー。日四やまちけろろひるねくくー　やはさくらえ

ぬ　山櫻花し。万八あーひきの山さくらえ花日ちろへてかくくーさけらハくこひやも。日
あーひきの山さくらえ花ひとめとにくー。日十あーひきのやまれちてくさくえくー
やまたてひのげ　山下蔭し。和薔薇ちかか和良。万十九あーひきの山下ひけかつ
らけるうへろやさらに花をちぬたむ。書説ひけハ菱をりを

いへるハ非し

やく　ちほ　燒塩。方五寸乃あまの一日せれちほやくちほのかき之ちり
きいまる加も。伊あーりやのをとりしはやきいまなしつけろを
くもさくれ

や　矢。方二にしたりつやう寸くくいきの。日せあめこのやハ橋乃小竹乃や
きにけや

にもうてまことうえむやてひーきこのを。日三まさらをのちり五
ふかれこーいつる矢を後こむ

やきこち　燒太刀。方六やきこちのかーうられな
ひーいかこりつくか稼

つまれらをやほくこちこきにのれをひ
えけや。日サあさこちひよ稼のこーあはハやきこちのとろもわれハかりひこよつも。日九
やきこちのたかひかー稼りこいこる。日四やきこちのへつるふこ八けくやわきこ武拔
日燒種乃鉦種以上石佛事乃如くー

やきて　安倉。日仁後紀ほーーくてのさうき山とつきゆこーふこ
。やきて及をつくれハやきこちやきこちこ元

やそむーろ

やこやしくちれむーろかも
。倉とよみる如くあきをこ元

やな　梁。和梁。夜素奥梁。唐敬之籍夜素紋昭奥
。倉也。日神武紀

保水西紀亦有弥梁取奥者。方
三このくれこつこのさえこのちこれこハやちハうこれてこられこもあらん。日

やすとつ

いにーへにやなうつひこのちこうやハいまあきーーつこうえこえも
。古下君うゆきけちらくちりぬ山こつのむこへをゆこむまつよハまこーーー。方二武日上自紀
元山多豆者是今造木者也ーー。日六やまこつりむこへまゐ了むこ。和鐺多豆未

やまこも　彼薦。方三寸にたりむ小元の去きやのかきをてむやまこもをちき
てこー。日ろのやまこあれトぬひてきこ。日土かりこその一元をちきてこぬ
きこと思ーーぬれ冷こちちーー
。日独めこちこちあやもちあやむろこ

○以　既出　○由

ゆ　良或自こかけるにようてゆふりこと粉これこ多之里中ちちりの人をあれ
ゆこここ紀在のすをこほてこここ元。日神武紀ちてちあていちこの山のこのまもも
いゆきまちらひちこへかれハやこぬをまつこーりこかひここもいまれけここ。方三たころこ
ら四こちいてここれいきーころこふーりこれこ雪ハ尽こける。日五ここちこりちこ山へ也
こく毎のにけいこ元ここ

ゆ　高之山を元元をこるをゆこ元又ゆこーこも。日神代齋
いこ多にけや。れ多ーー

ゆ　庭之橋柱こ。方二けまこもゆこーけきこもこ元。日四ゆ
ゆこーこここ元。日雄略紀ゆ
ーきかもうーちこ元こめ

ゆう兎と　將往こ。方七ちここいつちゆりあしこき行の
へこ多ここゆけや裘高こちこれ山こ行人。日十
ひこここにめここひゆぬれ山を元

ゆき　往こ。日天智紀ちここまのいゆきこ
ちかるまこにりちこのつてこと

ゆくさとくさも。日ゆくさくさの。日九行まくさ
そくもりたゆきみり

ゆくらく　後く。今俗そゆつらりくふ海ゆ日し
にてくやつてまし

。万三大舟のゆくらくにいさお。日三はんの
かちたとゆくちらにい。日二やハ

ゆく　寄く。万土ふりくりくちにあくてやわらこひそく
ゆたらはてゆくくとい

むち大舟のゆとにるちむ人りてゆそに旅ゆふ。万三ゆ
たゆえてい。日をふりうりりるりを寄よれる流ゆとけき男をわりよるの時。日三かく
をうりてひむよりとをまくるの如ゆきえあまくうをを。日五あきらかと作ひの
ゆにわりへらうりるる花りとよて

ゆくにたゆくにて　きまくよいへまゆ日し
矢やも。日サきちもゆけきかも。

牧務五六之之。万七

つくるゆくにちゆとにうきぬちん人ゆもゆるもずりかてまをを

ゆちり　寄勅
。古今うちんを人をとがめう大舟のゆとれたゆとに物とよころう　。万七

大海のつるをとゆちりを波のくらくとおりへる海のきやけく。日四いるもとろにより
る流といへるる日し。源さうきはおちのようかをの俗わちくまりたまひてゆそれ
ろくくまりくくえ天のくちゆちりて。仏を石紙とあと
つくるいくりひきはあちにくりつちくゆにをちてくくるに法人りたりに

ゆ　五百角八。日神代七代天照大神髪髮及脱所經八坂瓊之五百角佩伝。日湯津
爪櫛。日湯津杜樹。古中えひろゆ教ちつえきい。万一河上のゆつ磐村をを
むさ後幸にてかをぬとををあまて。日十ちるるも教方けて
ゆくをこちの一りゆさくうへにしとりゆれ教を

ゆけ　暮毎。古下れ
ミーりを天男の

あけをハよりくくれゆけをハよりくくにわきつきうをこの
いくをもかあをを。多ケをけとむをてをあふ教ゆ教含をハあ

ゆけ　多ケ。ふ迷くうう
。日一。万三ゆけとひいくうくちてこ
くうきにのれ教ゆちゆをを。日四多ケ。日十七かとれたゆけとひて。日十三道を
出ちををくを
いくとひくハこ

ゆこ　故有如こ。万七こえにゆくあれうの川りよ
。日十四ゆをハちけもこらをりてう。万九ゆをよくきて

ゆひ　結こ。万三山をりあ
。日雑器やまのをのうまをゆをに人紙らをこ
にをりゆひとくゆひのれちくう。日土あさちくくゆ小地をあゆをうををいうちりく
いひてきこををんまとむ。日十九をくらゆひれをてうりかあさをくふのたう。日十三あさ
ゆひと

き　節こ。日七茶紀れほきこを
きくゆ

ゆめ　夢こ。古下ちたくこゆあいくをちつまをゆめ。日あ康紀文

人のあやひのことくたちよきとえんとよむ里人やめ。方四あらそまのとしのへのわい
いましたとゆめよりをこりえのらんる。日一つきもをえやええまんやまとちるつまつ橋ふり
きるをゆめ。日二浪とつをゆめ。日八ゆめ花を

ゆら むら。日題字紀をつくよぬてゆ
見にちれる。日土ちちらいはゆるつとあるるく くもよたきのちらしも。日神代紀に
面而手むも玲瓏ゴウとちれるをしあいくうむけるうやい。古上其御頸珠之玉徳母中良
逆元中良也志所い。方十是むもるをもゆちれるをきてうけーまぬひあへむかも
日土む簪。日十三よにてけるむもゆちてにい。日小紀ゆゆちに。日廿ちを乃初子のりんのむを
きあにとるかにゆちくむ乃を。玲瓏をゆちとよちいはる乃受乃てりかやくをも簪をこ
めてゆる

ゆりもあいむ。方十八きゆりるゆ花ゆりもありむと
るへー へめも。日ちりーゆのひりりるこゆるさゆり花ゆりも
ありむく里ひりりてき。日さゆり花ゆりもありむと

ゆるせ 後こ。日神武紀れこのちぬやへ
わりへこう今めまきかもうるちしみちを やかちのきゆるやとやみて
。方四まうかえときーんをゆーて。日ハちさ
にもゆるしたまりこ。日土人かゆさむこ。日三あつさちひきてゆるさぬ。

ゆるみ 後こ。とりゆるせとはーてもかゆるせゆるれゆるみりたたらきちえちるへー
。方十三 芸れひゆるみこ。日十七ちちるふく。日土様ちりてゆる

さぬこ。日ゆるれてくるくこ。古下大君乃ちちゆるれこのよのやへのちえりきい
ちくはあり。文選古詩之相去日已遠。日景行紀不二之間。日雅言紀不之。源さまちん月にゆるりる

ゆるりる く あくるりまむこしくこ。出伏日記ゆるりちくれ伏てこ。蜻蛉日記
戸紀ゆるりちき 旅を畏りてこ

ゆづりぬ 行幸こ。方四れ乃多之月ハゆるりぬこちえりるこ義
きこうあゆぬ夜れ浜く。字治餓鬼ゆ中世世豆岩ネ

ゆゆを こう雄こ。方九本のゆ乃むーちをりる失も
ち雄くりちひけーはのへるる

ゆき ある 雪し。方二ゆ宮にちちふ
さよふちまくかのち。日ゆ岩乃れちもよいひてふちーゆ先ーゆのちとけーるこにちり
けむ。日こ。ゆーのゆよりれくゆ宮ハこち月のちちにけぬれハるの夜ゆりけり。日十七
あーたまの年のちーめにゆそのちーえ

ゆるーるーーりきめゆきるハ
うれーるーーりきめゆきるハ

ゆるちち。方十六ゆるちちゆ乃ゆちちゆれ。出
ちゆはゆ。日十岩ちの雨ゆるこにゆ出ゆ乃ゆ
をちゆっへ乃ちーつゆれゆ

ゆるり 夕凝こ。方土ゆるりの高れ
つちそ人ゆ きにりゆ紀元にあるこ

ゆやー 夕霧こ。方土いちゆ目乃こまくぼけくゆやーの麦系
土ーるぬ うれる月まつうこと。日四ゆやいこちちくーー月徐て

いゆけるところの
間よもすがら　ゆつづ　長庚星。和太白星一名長庚星。養見於西方為長
庚此間由不見。漢東有啓明西有長庚。方言此
つもかくよあまちをいつまでか仰てまむ月人をとこ。月二ゆかつゆかりかゆ
きくきぶ。月立ゆつゆのゆへよりれハいさぬたくい。六帖日くるれハ山のそ岩ゆつ
のほくくいこれとありぬ君ゆ。よひこにちるゆかむ　ゆくさ　結月。方言
夕ゆつゆ月ちきろらよひのうりくれそもむ　あまのそら
うりさけうれハきまうちりてかけもうち夜ハえけむ　ゆ　湯。方言ゆくさ　ゆ
月丸きまゆくひきてかくもるつきひくをとくく　大君の与きまセ国の
こと湯ハしもさいよあれもいきお。月五あーかりのくしのかくちくゆつゆのよくも
きくらにころいえあくに。月三　伊豆温泉。月六宿湯田温泉。月一自紀温湯。月　伊
湯宮。月三有
間温泉　ゆくづうかへらぬ　逝水不返。方十五ゆくうつかへらぬてくく
ぬくくく約あつとまぬてく。月十　約あつくくかへさしおくひろめくれハ。
古今きくくぬくのやちくひかるきハちくえつかちうぬちり。論語孔子在
川上云逝者如斯　ゆづこ　寄家之ゆ
夫不舍晝夜　ゆりの花ゆりそこにもいゆ　ゆ　齋藤之橋をれ
ろひときゆき

よまりてまくをりゆ。太神宮儀式供湯殿下姉い。方十五ちやきめ松きりれろーゆく
ぬまきゆくしき君くこひくるかも。月七ゆぬまきあゆ面をとゆむるとくく
ゆ　うげぐち　幕位遠にて口ゆ生うかきくさをうちるへー　方四ゆ
やくの山ゆけくゆ入ちゆ家行清のくくをくおくほ多かも　ゆ
木綿入。方三ちうけ　ゆくりつけてい。月二祢山ゆやまへさうゆへくくゆかく
のくゆ多にるうくくけくひき。月七ゆつけてらちゆやくくちくえぬくくけゆちも
えのえけきた。月三　お坂をうちいてくくくれくけはの海石玉ゆ花ゆ流ちちうら。和
木綿由布　折之多白糸者ゑ。古諸於送天富令更求次讓阿波忌部氏率往東土種植
麻穀ゑ好麻所生故謂之穀木所生故謂之穀木所生故謂之穀木　月　木綿　俗比未由美折之多白糸者ゑ。賦役令曰木綿ハ紙木皮ゑ時珍曰其皮中有銀条。玉
篇云楮穀木ゑ。唐音云かち木父也。或云花英茶交如果杯子亦要後凡土記云
速見郡柚富ゑ在郡西此々之中楮樹多生者　ゆ　ゆ　木綿花ゑ。方六ちつゆ花ゆ流ちちうら
ゆ。月七ちつゆ川ゆゆ花ゆ流ちちうゆ　ゆ　ゆ　

つゝころ
まてゝ

ゆき 方六ゆきとり神つけ衣。日ゆきゝ衣、ゝ式夾纈。日天智紀纈。和纈かゝ舟紋結帛爲文様也孫幅曰繒之直爽爲。今カ如のこゆひと
いゝるゝく ゆき ら。古上ユラフリ袖振立而。方十三ゆきちらゝりたゝ ゆき 叡ゝ。方三叡元員
ひちゝへし。日三ゝりゝゝるゆきゝ次ひさりきゝゝ てゝ。日大体入ん
たゝゝ叡れひて。日七叡かくゝ体の雑ひろき大体ゝ。日九きまりゝゆき ゆ
とりれひて。和歩入所帯皇叡曲皮心筥及其厚也。日神代碧叡ゝ

ぞひき 本作ゝ雑ゝ方三ゆきゝきかちたけて。ゆつゝひきハ ゆぞ
神代たゝゝゝのゝる時神のもゝてをとりありれかくゝ ゆ
し本作ゝ雑ゝ本作ゝこゝとれゝくつけゝりゝれゆゝをゝゝてゝ神へゝ白ゝゝ
ゝゝゝ。方三ゆゝゝてゝとりをちてゝ。日六ゆゝゝゝ白の山。日十二ゆゝ
たゝ日
ゝ出ゝ

○江 既出 ○陸

子 徒ゝとりの男徒ゝ。方五きゝゝゝとゝひゝゝをゝむゝゝやとゝんいゝやゝきゝゝゝまゝこ
をちぬゝし。日十四ゝゝゝゝへゝ衣の袖をまゝゝゝかゝあまてゝくゝ白浪とつゝゝゝめ

よ 齢ゝとゝひゝゝいゝゝゝゝゝきゝてゝゝゝ。方一男ゝもつゝゝゝゝゝゝゝゝの男の妻
れをいゝむをひてゝ。日二天の妻ゝりゝゝけゝれゝ大男の氏寿ハとゝしくゝあまゝゝゝゝ
ゝ。日十四後ゝゝふゝゝむゝゝをゝゝをゝゝものゝ
ひちにゝゝくゝまて男ゝゝゝかも。ゝゝゝゝゝゝ
。方三神代ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆきふけとし。日ニよけくそろおきく。宗祇集ほとゝきす次第へ

よきみち 路道

ゆうはをちかてりいまきぬ〳〵しいとゝろけよく。よきちくちけ日

。万上をうときのゆうくるたを人ちかうのうありても見る夏まきむよきこちるセ

む旅ゐお。日九宗人のつひちるらし青高のようれしわをぬられかゝ。岩井集小

世山ゑ見てゐ本こうのろしまさんよきつきれや花のあるわハ

。春屋物集よきたをしうかくしい。古尺花のあるハよきて花

よてゝ心し 描こゝ

ゝ。万九恒ほちん人のようとゝ三けきうもあるむ日まねく月の花めん。日土人乃云

乃ようんをきてて〳〵。日八人のきにもかゝもようさもく。日慶祥紀 總言。古市つぬ

かのかによこ

ちごを 夜ゐゐ。万十七ほとくきれようをちろ〳〵あとさハ花ようくも

きらゐく

かれんちちろむ。日土集人の見まれ人夜書市白くわゐ名を

いも〳〵つるとそのまむ。桃子ゐ宮ハよう

ちるぬにくいきとなきるやく

ちざ 任。日 神代紀 任。日 命。古上

依。日 舊事紀 封。日 万二よさした

まへハく。日三大君の

よきしのまに〳〵

ち 好。万十つるやようのきくるりとつけやらんこちくよ

似。日 ちりぬよもよ〳〵。上乃よくの多〳〵れかる〳〵

因。万四ようもあるあらし。日土をまきうにつろ〳〵人ハうちんよ〳〵を

とちてうまこ一日えむ。日ゼゐを約月ようをとゐきられ日ろハられく

百公上

もようよ〳〵もあ〳〵。源氏物語あまりの

ゆるよ〳〵ろろくちろくらんく

ようんちとれりむ。日かきもゐう入ようやまをようとろ念。日十六ちのの山いと

くちきりろあらをろようれうの山と乃ろ三ぬのむ。日 欽明紀 資 因。ようと

ころと

りゐさ

ち 家〳〵。万十四かに〳〵のまくのてこちをまこようかもつまこようよ

てようきよも〳〵。日十六れきへより舟人のぼるようひようせていさつゞ

やらむこいのやようりを。日一ゆ一ようハいりちやうすし三とも

ゐもし〳〵ゆるてようやし。万二ようふ〳〵と人をろ〳〵ようを三ようハふく

ともい〳〵。日かこちなし〳〵と人ころ〳〵ようし〳〵をやしかこハちくくもむし。日土ろろもし

ちこ見ろ

ちろく 副〳〵。京ほ宮にふられてさけるうちの花見ろりやらハようてむも

まろく

。日十つ〳〵ようつけてようへてもうと。日十一ようゐる見ろにくうちく

に又こゝゐ。日土見ゐ副て山を

ようやめく 安餘百寿〳〵。万四 寿百世の

山を乃ふちをようをちく

そえきぬ。日見ゐ副てあるまてゐかも

かようひ一見ろうえぬころかも。日十四にろと山ぬるいつるゝ〳〵つるようを大一ゆろらし

あやようかろ〳〵も。日とほ一〳〵ようこちのそうぬ乃あほ一〳〵をもちあハの〳〵三ようもちるころようられ

○日ひと祝ろこいさるよからあを祝ろこいさよつをのようまつよも
○日十三ひとしよ祝ろこいさるよ　よろ　外之ろ
ぬをようのこえてい。日四天中のようのこえて　三つこえ
○日十よろにのこえてを平良ひいこまのい　よぢ　拳之。ろ八りとつらにつちにちら
つこまセわきそこ。日りちてをちろへくうの祝ろてにきれつ　セハまへをちとちてたちり
ろまろうむとも。日九月ちてをりもをられも。日ろろえちとり　ぶむ　淀之。ろ三
ぬ日香川かえちをられちきりれ。日五まつら川さセのちくちちむとわれ
ハちまれ男をしまむ。日十三あらきぬとりかへ川の川金ちのちとまむとろ
男ひか　ものつ祝　易学之世の学の学ちへし。ろ八ちのつぬちきくいくしきち
ぬつも　こちうこをちうきときれハちりぬ。日五世ろちうり
つねちを　よぢすくに　不石之。ろ九ちて内ちりぬ。日十三ら　ちぢ
けるこ　ちぬのちくのちふやをこまをを先とこ
ひ　徒増之。古上やちろこの祝のこちふやしまくにつきかの祝てちほくしろこの
ろちくりしめをありとくさてしさちろのちありとこしさちひちありかち
むセいこ。ろ十三ひとくにちちろちめてたちろ徒もいまさちぬちさ来ろめちける。日
十三ちつををふちちひちるこ。伊こしをへてちちひちりけるを。日結仲紀聘

○あちこいいさ　ちぶ多めし　ちびとち先　呼つま新之。ろ十九このちぶのろけきたこへをちひこちち
にちくほとくきにちろこ巫　ちよびて　呼三之。ろ八枯えきのちりのまちひちのちと
をきしけりちつのしこ　てちくるる廉のこ巫乃ちるけさ。日廿
すぶちをのちにちし　ふこ　数之。ろ四月日をちてけきてこましを。日十七月日ちこ
かたさをしうのこ　て妹まつちむろ。日十三ちぬるちにハしちあへむちも
○ひとりめるちひ　む　誕流之。ろ四百年これい古出てしむこちれハいこえ
をちまむとこ　しを之い益こと。源相木たちこふをつと拙拙て古つくも
ちとちろひめしこまふ。六帖ちこ
ちこちこちこちこちこちこ　ちをあひひきえこ
依令拙之。ろ二天地のちりあひのきいこ。日六あろちの　ちろぢひゆく
ちりちひのきつこ。日十天地ろこちちりちひちほくい
○日祝代　俊倚　行。日十日　ちろつこひ　萬葉之。ろ一ちろつこひかつこして。日十ちろつこ
ひかつこしこい。日二ちろつこひかつこちれと
ちしなへ　宜五之。ろ三ちろしなへちを乃考のたひき　ちろづき
に。日十八祝乃こちとちちろしなへこ

萬葉集。廿八。よろつき

まつるつきしつちろ。

よくミつ。月六から衣きたりの里は雪にひをつけむよきく

もかも。月六よきこめくたるもあるぬを松戸ら角のよそれよ三名会はけむ

。廿五。よちろちろてたつさゝりて。月六。ゆらゆちろハミかのつ。月十四。この川

にちさをわらふこちるあれもちちるをしるいてこたそりぬ。月名乃よ

きるゝ

いへるう

よちもねちくに　夜寝不寝。廿五。きゝを打りてよい

夜目。廿五。月十五。はまてちらし。月山

よ　夜。廿三。山をあちこちに松ゝりよ。ゆくる月

かはらるをひしよ。月十五。月十あねさんひるハ

ひとりとりき。月十

四さひてぬもむ乃ちは。月九。月九さ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ

らみ　黄泉。方九。とほつくにとなつかしきくにとのこと。日神代　黄泉（ヨミ）

よこち　きたくにの黄泉よまつくにとむかつくに。日神代

夜道。方三。ちまたのこと。

らみちのみち　四方之道。方六。わめのちまたのこと。トノミチニハ。日九

かけしりよみちはえけし

人をさす。日二。わたのくにのものの人のこと。

よもつ　夜戸出。方十二。わきもこ。ちまたとて乃ちまたてしりろろをの

日廿。きたくにのくにのくにのこと。

アつちはあめとつち。約

夜出といへるうらし

よつこどり　道子鳥。方一。やまにはちきてらうんけうとりき作の中山

なくきうりの名。日弘。ちまたのこと。日八。ふひのいとやのうらはよふこうさく

きけすのはなりめ。日十。うくひすのこと。

ほりくくりこ。法華りのやとりの名。

こちくくに。ほれ迷われひとりきくくよりあちこちろ

せさら

よもぎかづき　蓬髪。方六。あやめくさをかつきさうこつきあく

ひちろれとくいちな。歳時記五月五日皆帽菖草採艾

懸於戸上八

拂毒氣也

よろひ　裝束。日神代　あこひのひろりはありくくひくはへて男よろ

ひ一半ふくくりりり。方三。ひとに今人ろひていとな。日十

物之色の男ろろひをくくにてもきき書をこひやくら

さし。日　威儀（ヨソヒ）　束帯（ヨ）　衣冠（ヨ）　狩衣（ヨ）。遊仙　袴（ヨ）　服

ちるいと　撮糸。一盃

こうろひにれる糸をもてつけてまーよの今ろくやき。日十

いとをりろるあーひきり山やちとれをぬるむとれをひて

ーりのにくくにをつくりくくくくかめる

横目。日　底物紀

よろ

大きくきうまちにきろーちをせまつち

よつりぬ　四船之遣唐使の船をろ

四人四船にのり約をり。方五。よつりあひをやかつこと

大使　副使　判官　主典　つの

夜舟。方十。あすかかく

ろりかつけりものそろういたひてまーむ

ふひをこきてあけ

ぬくくりりむく念夜神かつれあれやり月十五まさうりうあび

くくれれへまはれきへはうとにかちれれとちり

ふるひ・うるそ

はる　夜叉。方三。ふひるむとりふと

ゴ様之光　秘密夜叉　夜叉。

怪石之田又在武蔵国　秘密夜叉光照夜果以為怪　棄之地

鄰人隨而盜以献魏王　王怒而拜此無價之宝

○良

ら　助辭。万十四。ゆらゆらたきてらもきあ。日いさめ。日
サゝちたるそらの乃ぬらゝ。日十二乃ちら乃曉なくたつ乃。日二のよ
らハさゝふけぬらゝ。日十六。ゆつきかへさぬゝこらも

らし　ひて在りの之ゝ。らハ。るゝ。連
。後紀。宣命。天皇我詔旨良万止。乃良も。助辭。ちら
てあるてあらをてめてゝらゝをゝ。日ゝ。万十五乃也
に焼きゝ。ゝ。をゝめらゝ。る也乃ゝいきつゝてにらゝも。日八。ゝ乃五あつゝ。君
にこひゝて。ゝさゝらの花ハむゝへゝらゝも。日十。竹風。山ゝ。ゝ。ゝ。乃ちゝ。ゝ
アゝゝもかゝゝらゝ。日一。ゝ。ゝ。ゝ

わ 助辭也。日神武紀 烏到其營而鳴之曰天神子召汝怡饒過ゝゝ兄磯城名之
曰。。方十三うるわしきとも枕書系こゝりてといさわ出てゝむこゝゝけハゝちが
回こたわゝ光ゝれるをりよ。方一ハさきにいらこう後ゝこくゑにものゝらんゝあき寄
わ わを。日わゝれあてゝひゝあゝハわひゝをむゝのくまわゝゑあゆへわゝセ。日さゝや
ゝくもゝちくゝゝほゝ後乃去れきゝの御わゝ約まゝゝゑを。日拾ゑゝいゝわゝをれハ
かつき後ゝあゝゝやゝゝらもたひれわまゝを。日うゝゝゝちゝ里わをゝゝゝ後り人ゝ
つゝくゝひきゝりゝ社に。日上
ゝちゝゝわゝゝちくゝゝほゝい

わかせ 今津ゝ。方十六さ次をへゝゆわセゝゝいち
わゝりひゝちゝりゝゝむきゝゝゝあむゝゝ子

つゝらた 多ゝらたハ助辭也。宣命ゝゝゝのゝ後。方ゝかへゝらまゝ多のゝゝらゝまゝ
月ゝ わきてゝゝゝゝゝゝ人ゝゝあるゝゝ。方ゝ人ゝゝゝるゝゝゝかゝきをゝつゝゝゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
。日九人ゝゝゝるゝゝゝかゝきをゝつゝゝゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まことあ
たむる

わゝ 由也。日本紀曲浦。わゝのまわゝる意也。万一きちゝ乃志のの
ちわゝ。月六ちゝのそつる わほわゝ乃えは

わつきもちらし 別不知しつい考給。万面をけるふつきるうまれとゝ之る
つゝこゝ。万一永きる日はくれるけるわつきもちれゝ。月土

いつる日の入わきまゝに。月十 わび 惑也。万四ゝのつゝとわひをるゝきにゝ。月た
喜雨のぬるわきまゝに

。月わひゝゝゝ。月十五 わゝをひわゝれてゝ。月男ひわゝ
月ゝゝゝの約わゝもわゝれをわひゝゝ。古上日子遅神和歌五ゝ。古字
わひゝらにまゝらゝきゝゝあゝひきの

わまてゝらゝけて 砕而推而。万土
やまのかひあるけゝやいあゝぬ わもゝはわれて

ゝらけ わ 我ゝ苦上いまゝろいわゝりゝちゝめのちはちゝりにあんをゝ。万十六わを
てゝゝ 矣はらめやあきらけゝわゝをるすをゝゝ人とわを矣はらえや第ふ
きゝわゝをりはらえや。月四いて

わきゝゝ。月土わをまちかてはゝゝ わうゝへ 美ゝ。古下ひけゝのわゝゝるはりゝつゝへ
ゝりねてまゝゝのわいはけるわも。万十六へ
ちてをつゝゝはをこのゝこゝをの矣わう わうへを 美ゝ。万土たいぬゝもまゝゝわ
きりへゝさねゝまらえも かへを君をゝまゝむ。月六い

むつめのみわゝへりゝ。これゝふをちかうとゝもへきゝ。万五わゝさうわゝくゝちぬ
をとゝえゝくゝりえむゝもまゝをちめやも。月をゝをゝむゝりえもゝはゝやゝいさし
きわゝゝまゝゝをちぬへゝ。月六むゝゝゝより人のいひくゝる老人の変ゝゝあゝ変ゝあゝ
きのセ弘仁三美濃国美濃行幸ゝ。後紀 岩上考之年十月丁酉朔癸亥天皇時軒
詔曰朕巡幸年九月到美濃国自盥手面皮膚皆消亦洗痛変無不除愈在朕身其験又就而飲之俗之者或
白髪反黒或頽齒更生或闇目明自余病疾咸皆平愈昔年後漢光武時酒泉
出飲之者痼疾平愈谷神瑞書曰酒泉者美水也養老益之精也寔惟美泉也即改
瑞朕雖庸虚何違天貺了大赦天下 改養老三年為養老元年ゝゝ

わうけまバ 美在考ゝ。万五わうけまバもちりき
ちらしまひはせむちゝへりつひた
ひてゝほらせ。月十六万ゝゝしこらまれひふかゝ わゝゝ 美ゝ。日後代紀ひら
乃ことわゝけむこらにけらをか移えやゝ かゝやふえふきのほるあ
ふゝのやけをのわゝゝうふえふきのほる。月寅紀うゝゝきわゝきこを矣てりゆゝむ
。万土山ゝゝろ乃ゝくせ乃わゝこゝ仁ゝゝゝゝくゝあのわゝこゝいれ
けよゝ孫の尊祀のかれまゝゝをゝゝも。古代教生云天照大神育吾勝尊
特喜鏡愛尊懷腹下称曰腹子今俗呼雅子謂和可古也也 わきださむこ

脇狭ゆ。方三わきたさむ子のちく

ゑ。にとりあ〻ふ。ものしなけれ〻

わぎも 吾妹。かいの約きこ。日仁往紀はし

たかこれハやれむしろも。古下わきこよハをふ。つら〻くもろさやのまさつこわきしく

にへゑこらに。方一わきもゑをもやこ涙風やまとするわゑまつくはきふろさるふゆめ。こ

かいこれけし

ゑにふく

わし 方十六 ゑ〻とての紐のやうに吉きをのたこいるわし。日ん

なまをまぬら

わけ 方四 吾君ハわけをゑ吉ぬとおゑ〻も。日八君のこえむやわけさ

るやつこわし

へよこよ。日吾君よわけハこゑ〻ん。日戯奴 ゑ わま 之ゑ。ゑゑも

きまゑこ。たちふきよ入る

ゑ〻こ。ゑゑわし〻こ入るちふし

わぬ。方廿 大君のここ〻かこ出ゑれハわぬこちつ

きていひし〻こたゑも。ぬこにと迫吾ゑ

わ〻り〻り 涙守し。方十わ〻りとりゑわこをこふこゑのゑ〻ゑぬかもよ

かちのわ〻〻やぬ。日わ〻りとり舟もやわこセ〻こもにふこひかよ

君ゑあ〻ちく。日涙守舟ゑかさむやもちり〻むこれこてのちハあハし

ゑのかも。日涙守ゑかさむやもちり〻ありまて。こふたゑこゑろゑ

セ

このをゑゑこゑ〻ちゑ〻ちゑかりゑ有ても君ゑゑまきむこゑるゑゑゑもむ

。日ま〻ちゑ〻ゑ〻ゑかりゑ〻ゑほこてゑどけこのあゑ〻わきゑさをゑれ。日土わゑ〻こ

百八

こをる老人ゑ〻て。日大老人も世のわゑ〻ゑ〻も〻

。日二かゑ〻ちゑ〻りこひゑきつまむたわゑ〻ちえのこと わきとわりひて。方土 あも

ハゑ〻こ〻ゑ花われ〻男ひてまきてさゑぬまも にもわき

。日四われ〻ゑまして人ゑこゑ〻りゑ。けゑ〻ハ指笑 わきちゑに 吾ゑ〻こ。日方七さて

ゑこ〻ちゑ〻ちゑ

あまハわれちゑにゑ〻りゑ

ちゑこゑ〻ちゑみ〻ゑ〻にゑも わきけゑ〻ゑ〻に わきゑ〻ゑ〻。方四わゑさハを

にもゑれちけゑ〻に。日二吾大こゑ〻ゑのちたほゑ乃な男ひゑゑ〻ゑあハ心ゑもゑ

ちめかこのつきてちまへゑわきちけちゑ〻に わきくさ。方十六 わゑ大こゑ〻ゑ

てをほつこのあゑ〻わきくさをゑき ハちゑ〻わゑ〻ゑほこ

。腋臭をわきをゑかをてこえゑれゑり わゑ 吾こ。方八わゑをゑの枯ゑ枯の花風をゑこ

。日八 腋臭世ゑあ〻ハ〻てあれハ〻。日六 ゑ〻ゑ〻ゑ〻

はえ命ゝ。和漢童即
あ祢ゝ。わたゝ豆美乃加美

わさゝた　和田ゝ口分田をとり入。万七位の又のをゝ
からにる姉ゝもゝ一奴あれゝ姉ゝゝと

ゝに私
田をる

わにさのにを　和保土ゝ佐ゝ麦を大和語と称わ弭ゝれゝよりゝ玉を
いゝ佐ゝ。古中いちひかのわゝきゝ丈をもつゝハたゝあゝ
らけ

わのを　吾許ゝ。日土さ佐竹のえかゝれるわをゝろわを一ゝれゝかれこゝ久
ゝゝゝ

やも。日八ゝゝのあまのかりゝよ和わ一ことひゝ男ゝわりわ為ゝさむ
。日ュあゝゝのあたきゝ志ゝなゝゝ芝ゝ志てゝも妹ゝわゝゝいゝゝちぬゝこえゝむ。日十妹の
を乙馬ゝゝゝら多ゝていゝこまゝむゝ。日土つゝかわゝと以ゝゝを乙ゝゝ。日九妹ゝゝ
ていまきのゝゝゝ

わゝゆつる　美能約ゝ。万五わゝゆつるまつゝらの川のかゝなゝゝ
佐ゝうゝの奈ゝゝ乃ちゝに一ゝもゝ一われゝひめやも。日まつゝら川

むゝ一きのゝ一にわゝゆつゝいゝら

わ一　能ゝ。万十四つゝちねよわゝちゝ一わ一の
をゝゝらむひゝのゝゝゝゝさ　ぬのゝをゝちゝきわゝゝりちゝむあゝゝゝな

一に。日十六ゝゝゝゝにの二上山をわ一ゝゝゝるゝむゝゝいふゝ一ゝゝゝるも男ゝゝゝる

わきべ

ゝわ一ゝゝるゝむゝゝゝゝ。日九わ一の佐つゝゝの山をもゝきつのゝ志ゝ波のゝゝへゝゝゝ
ゝゝ多ゝゝゝかいの約きゝ。日景約佐ゝゝきゝゝゝわきゝのかゝゆゝゝるゝゝゝちゝゝゝやゝゝと
ハゝのゝゝほゝゝらゝゝ。日仁佐佐あをゝゝ一ゝゝゝゝをゝゝてゝゝゝゝゝゝゝをゝ

きわゝゝゝ弭ゝゝゝゝゝゝきたゝゝゝゝわゝゝゝわきゝのゝん
にゝくゝゝゝの。日ュゝゝの花わきゝのゝのゝのゝきてゝる。日十八ゝゝのわきへをわ
ゝれてゝゝ

わゝくさ　美ゝゝゝ。万十ゝゝゝゝのにひたゝゝゝをゝきゝゝゝゝてゝゝをゝゝて
ゝゝへゝゝ　むにゝゝゝゝ一ゝ敢ゝゝ。日二ゝゝゝゝのゝゝゝゝ。日三ゝゝゝゝをゝゝゝ
ゝゝゝ敢ゝゝ。日仁賢紀古者八弱美一為夫婦故弱美為美。伊

むゝ一ゝゝゝけゝゝゝゝゝゝゝゝきゝゝゝゝゝゝゝゝ

れる社の四はしらかぶつらなれるあるぬうも。方丈記時考の
をゝりゝ或はをゝうの田舞をおりて菖蒲をひろひてほうをつくるゝ。ほく
ゝはかつらゝ

わらをぐは 萱草。万四わすれぐさわらゝ有り。日三わすれぐさ語もちゝにうゑてれ
しこのちゝをまちぼうをまちけり。日三わすれぐさわらゝ綱すつく者々心のあり〳〵ゆを
わらをぐはぬうため。日土わらやとのはきめちゝとゑれひゝれ〳〵ゑりれゝをれいまゝ
れひいゝ。和萱草一名忘憂和漢礼久左。
考詩写浮雞筆〻注萱草令人忘憂

わらび 蕨〻。万八いちゝしるきるのえのさ
わらひのをえ出るまつにちりにけ
る初も。和薇蕨 和良比 初生無葉而可食之崔禹錫食経云白者

わゝ 綿〻。万三ちゝ
ぬひのつゝのの
日毋繁黒者曰毋蕨紫者曰基蕨置熟湯中令熟然後可食

わゝ 花貝〻。
わゝとは花ゝつけていまゝとはきぬゝあゝかゝまゝ。日五ゝゝひゝの
いへのゝゝもりきゝ花ちゝゝゝ〻ひつらむきぬわゝらゝも

わひま がひ 花貝〻。方六わ
うちゝにゝうれはゝゝいゝまあゝはひろいてりも花ちれ貝。日七花のえのきゝに
ゝるゝゝふゝひわちれかひ。日土きのゝのあゝゝらのえまのわひまかひわきはわひれ年
はふれゝも。日土わりゝゝゝに神さへめれて花貝拾へと特はわきゝらきをゝに。日一大
仕のゝつり傳ちゝわちれ貝家ちゝ妹をわちれてわゝゝや。ゝゝのゝゝゝき貝

をひろひちゝくさゝていきをつきるゝとゝゝにてわちれ貝〻はゝ〻ちゝへゝ。土佐
日記ころゝまわのをゆはゝきゝくりうゝちゝき貝いゝちゝたほうりゝきはたて
むゝの人をこひて舟ちる人のゝめるゝれる彼ゝちをよをちむわゝふるひわ
ゝきまかひれわりてひろはむとはゝはある人とへひゝて舟りの人やりよゝめるゝちれ貝
ひろひゝもゝ

ちを 羅〻。日神代紀ゝのたくゝきに花きわちをゝしきゝさやら
ゝゝゝまをゝ

次いはくゝゝゝ。方十四あゝゝうゝのをゝをゝるのをたゝさはわ
ちをのかちるまゝゝつゝこゝろわれひゝをゝく
。和歌者訓為得兒也得兒志歌歌也

○為

ね 岳〻。日應神紀ちつえゝら人ゝふゝりほつえゝふゝりかゝらゝゝ。日孝徳紀やまか
をにをゝふゝつみてたくひゝくたくへゝいゝをちれゝ高十ゝけむ。方二めゝりて
男をとはまゝとむぬえむのわゝを髪に宮はふゝるゝも。日九れゝれてわゝをひをれはゝ
ゝゝの半ゝるひゝ山をゝりふゝこゝやらむ。日七ひゝゝりかてゝこゝゝゝみゝゝて。日土ゝさゝこゝゝゝ
率〻。日神代紀わゝきゝゝりわゝもてゝゝゝまにわゝゝ為ゝゝいゝもはわゝゝられゝよゝのゝこゝゝゝゝも

為 。日孝徳紀たゝくへゝるいゝもを半れゝゝ為ゝけむ。古下ゝゝはゝゝつゝやゝゝれのたゝゝに

ね祢てむのちハひゝはかやゝゝ。月雄略紀いくゝゝけいくゝハぬれきゝみゝけたー
にハね祢沢のちゝくみぬむろのわりひつまあんれ。方四くさまくゝゝゝゝハつゝハねこ
きゝゝたゝこのうちちるむこうれをゆ四。日五ふーたきてわれハこひのむわさむう
ゆゝゝにねゆきてあまちきゝゝ先。日十四方ねてやらさね。日十九たひらけくカ方了
まセゝ。伊いとゝらき

ねまちづき 居待月ね。方三ねまちつきあゝの月やいゝ
にねてゆきけるゝ
九日を伏待月廿日を。十八夜を立待月十七夜をまち月十
ねまち月ゝりふゝう

ね 井ね。方七あーひまれさゝえー思うほかーねのゐ井の
ねハのゆ先ゝわうぬうも。日十九えのゝふの八十のいゆらうゝゝ
まゝゝちゐ井のうゝの

ねて 井堤ね。方十むゝかるゆよのゝゝゝられきうも之のゝとりる
ねゝのこのりた水

ねてろかも。日七をつち川ちゝるゝゝをねをゝやゝねて
こゆ流の音ねさやけく。井堤ゝハ河のあを

ねなうの 田舎ね。方三むゝゝころかに
切ちゝにせき入むゝてゝ川をせきゆをゝてゝ
えみちゝゝいゝれけめい

まハゝやゝひき

ねのこ 猪子ね。日廿四紀 あをにゝーちゝのえさまにちゝーゝとのゝ
ねひあけや

つくへこゝとやゝちゝろくくゝちひのわくゝをあさやつなね
ねくひつく 堰杭衝ね。日鹿神紀 ねくひつくかえまゝえのひゝゝのちゝけく
こ
きゝゝえゝ。ゑをやきゝもう ゑをを井せきゝゝえを思ゝて井ゝゝえ

今農家ゝて中ゝゝゝゝゝハ祖ゝゝゝみせきめくぶにゝひを
うゝて柴竹ちゝかゝゝつけてゝををゝををみゝひゝえ

ねるふ孫 和説文ね艘ね
流船著泊不行
也ゝ。方十ゝさゝをゝ
備ゑねる舟ゝゝ

○宇 既出 ○ち

ち 高天原紀。日天智紀ゝえゝーぬのえーぬのゆあゆこゝハーまんもえざえく
ゝ ちあきのをし 塊りのをくあれいくゝ。方十四あれいまさむち
ゝ。日十五 ちりゆちに

あいとのちハゝ ち 画ち。方廿ちつまも画よかきゝんいつまゝ

ちひ 酔ち。方三かしゝくゝのゝみちハ酒飲てをひゆきをゝまさ
たくゝゝ。日
崇峻紀 画ち

ちひ 食矣ち。方三ちまひるまひゝ。日四いちちまひをいめ
豊ゝきゝみ
糸ちひみけや

ちまひ 居て。日五ちまんまちひち。日十一妹ちちまひハ。日十
ちまも肩川。日十九ちゝまりの細肩板をゝ。日四ちゝゝーからに。日ちれくちゝ
ーて。日十八さゆりの花のちまりきかも。古上 白日ちちてゝさうえきてゝゝゝぬ

りそろきくもむきこし。後は紀うめやなきつぬよりてこそ

しきくくえおきまひひらけて爲こと爲あらくゑんてこ

女令嘘樂如此者乎こし。古上樂。日雄略紀皇太后視天皇悅歌盈懷こ。古

語拾遺云仁由都比之弄樂とのたまふこ。万十九ほきくくくくにこ

ちらひ 淘汰こ。万サ卅くさきに沢のなるちらひそりへ

にはまをら實をらはきてらもきぬ

分にあくの沢をちらり。或說云ちあそまてはあくくいあそ

ハ蘭のえよ似て世さく芋有てあ〜〜俗くあくるくいあよのてたらひちり

といへり。万十五くくあやまくよ沢よあくくつむくくあ俗のあくきのそろぬれぬ。

日土あひきの山さくあくくをつくゆうむ日くにもあそむちくハセむくも。詞林集

なたゆきくえハあくくのわりんもつむへきに爲さへまれぬくに山への里。神代紀文

第を伊弉諾つうくんをくくいりきつくをあるあくあくあくをつくくちへくあるろ

くくにあめろ **ち** 餓こ。日神武紀たなめていちさの山のこのまもいやきまくち

ちくくあへハわきハやあぬちまつくりうかひくくもいま沒なくる

○日推古紀ちちてるかくをう山あひひよあてこやせるろのくひとおりれれやちよ

ちれちりけめやさたくけのありやふきいひよあてこやせるろのくひとありき

百九十七

○**ち**

ちきろ 賭こ。万サ あまをくよちらにうきてれほらけにつえまつくとをちくち

にはきりつ夏けりろきくくもれきろふきかもこきくもけきかもこ

。大あのたくけよろ夏へるくてあまくくのいまりつてくてさりくくの

魚をくくれくをくれりふきれきちもふくらぬくくくくくへまく **ちきて**

きく 起信寺こ。万十九つくくもれきて耳ちほくきけこの賭よきちくくえつ

てあ。小ああ集をつこあをふくてやきくくほくく交沒きくくたたら

た努こてちころちれ **ちきや** のらさひむ 置杭こ。万十 ちらつもりれうまくくをくこ

む。日土ちくてるちにんまくくされきふくくくあきくきをりのくをりてれきやくくさ

ハちくくうきむかきるくらあくくに

ちくくくくくこ。沙をちきてのれを出るセる岩こ。万五あれをちきて人ハあくくくほこ

ろへとここ。日一ちをふちきてうちけく。日やきくをれきてくく。日十 隆宮而

うめをあをひろあくひきの山くく

つきていへあセるきくみ

ちきて ほへて ちくくあたりみちくくへるほくくれく

にひりちきて爲てたりつくくこ

○万六たるとなるたきつかり宮たくま〳〵てわかれ〳〵君ちとせにも好。日たくま〳〵
われを行〳〵る〳〵。日たくま〳〵ゆりかをうたま〳〵わきし。日四たく〳〵いて〳〵あ〳〵む。源を
う たくまかるる山住たるもせてし

たくう 奥処。万国処。菱万墓ゐと書
○人をたくふく行りふをを〳〵し

たくうをを〳〵山をえてきゆむ〳〵。日十二会きてゐ俗ちきゆ河い天中のたくうをを
らに立てうをる。日たくうなくきゆぬ山俗をし〳〵。日十三をうらくのたくうをを〳〵し
○たくのをのり

たくる 後〳〵。万二たくれあてをひてあ〳〵ハたひをむたのをまわ
をきめをを〳〵

たくる 送〳〵。万五あま
トやの山をなをまをものを。日五たくれあてをひてあ〳〵いあの忍のい
をろのをのをめのをなをもちまををちまををを

あさびわ
らんや　**たろし**　畏し。方七　ちあの波はたろし　それも神をたむけて船出せはいろよ。日あふこの海路とは寄年をやへ
ちむこくくはちに　かへりたりに。方二　やのをくわれいきけるをやとかさたわれを
。こかーこ　**たろ**　銭し。方二　かへりたりのをひを。日九　とこよにをむへきこのを
つるきくちわろたろれろやをの男。日十二　四のよりこてろたろく。源　きくこ
ちろをきふうあるかくりさやくりこてろたろく。日　ひちやーーにけこ
風りてつるをたろひかけぬろし　**たろふる**　押振し。古上　をしめりたにやいくをこ
なれくれとろりくんたろさよ　たろふちひわをくれひこつひわろ
たくやれはし。方四　くれろこのやりくたろふるりつをし　**たちぬ**　ふ殘りをこ。古上
にわろををやりていくあこのをを。押へあこ米を　ちえるしまり
ききをたかきこんるいろのきれちたし。方九　三川りふをもたちたさてきたるこ
ろてこぬれぬほれまはなーに。日十一　むりひみて一日もたちたたしくもいとをあ樣
を月わるまて。日一川くをりの八十くまたちたたろつこひかりこーろ。日十四　ぬるたち
にいちろくれこし。日十二　ひこ夜もたちたいちたろくり。日十五　一ぬもたちたいち
にーこ　**たと**　青こ。方十一　たくーこりのきものいくをたくこやいこりあくりのあのこよ
ろる。日十三　いきりたるあまのがちたとりくちかにいきりこよのりをける

かも。日十四　つむりやにきくうたとをたかむきを　**たなし**　日へ又たやくも。方十九　あま
りくのくちちーやかりきちしもも　さるひるくあれはろこさ
ろもたちくころろ之さりり年のへりけはし。日四　こちちもむりきもたちくろ
。日十五　たちくこたくれてをれこ。日天智紀　そちちをたはたのりこくこたれ
きここひこめくくきたやーーはよぬく。方十四　ひくこけ　きけきよりてきをこも
りたやーまくこははまくーも。日十六　妹やわれをこりたやーし。日たやーし
きはし。日十九　**たのともたのやや**　各くこ。方十七　ちりふくこりりあけまこはたなかへ
らもたやし　くりへう　さはたのこもたのやうーせつきくり。たのもくく
あまは　**たのうーーい**　各こまくくこ。雀児自物弱自まの犬自まの自をかこ
ゆこるくくちし。方十二　各こくくくこ人きまくらくーー妹まこひ日に
けにややぬ人こちえた。源もひあ　やのあやくーもりちもありかりりたのりこてさ
つこあくくこ。あこ春はやこくくら枯はきりきりの春りの花たのりくーこりころこ
かりけて　**たのりちをのる**　こ名告こ。方十　ぬここ春の春りりこ春はたりりこふいくよ
をへてりたのりこ名をのる。かりりこ立のかりくくーきこ
りたりかくくりり。後拾行かりこりりり

わのうとぐわり。方七。三ちの山にのひえのうとをうとりわのうとうとわ
ふいまとかしぬと。月十六。いやひとのわのまかみさひ

わたらぬるのわも 不負者。方四。まきもらをの里ひわひてあまとひなけく
なけきをたりぬるのかも。伊。むくつけきこくへのろ
うとはたふるのにやわうむたりぬるのにやあくむかとろうとうとうとな
る。深きりぐうくみをむつとりにやこと。祖花。系式了。わくれとわくぬ
山のまにさにむよちる わたぜる 帯にせる。日。後伝紀。大足のたはせるさら
うとをひくのちけきハ うとれひのむまひくれたきやひくも
うへとてくちけく。方九。こうとの神のれ伝せるちりい。月七。
宮ゆ山のたひあやる細宮川い。史記。劉敬列伝。秦地被山帯河 わび 佩。方十三
くかちの翁をとるこに公うれちくくちくさし わとほ。月十
汁ふうとれひつけちくくぎとにてちくきひのけとへちゆ 負。
うけきいこちゆきとくれまひハやむとやをのうとひれひてとほらせ。月十三。ちうの
かくとんよわうとくるまうこかこにあきつひきたひ益をちて馬のへわ。せ。月廿
たひうやのうくくちる
まてちけきつるかも わ 日。方三。酒の名をひくとれひくいすくへのたは
きひくくあうとうとうくさ。月五。ほつひくは

つらさうひのつまをよひきうくくちりわ
こむうの日まてにハ山れうの瓜なるあきとおほてうまれへる杜子品あをせる
遥無こ。月七。少のりにちくちふうとてわうふくにい。月八。ほくきんをきくをる
えち君うの家にゆけくれひくハくうりてむうも。月九。ほくおに曉のう逝てきに
たくうくなほ 作紀。方十一。は舟のへころうくくに
ときちなてい わたほせちとまふう ちくくもちふせたまほうわかはをへちこ
わたほろう 踏こ。日に紀紀つぬさもふいくのひめうれほろうまきこさぬうくく
えのきうまきわそのうまきくまつほひりくかちうらうほのき
飲朋呂伽こくるわたほろけくふ嘉七ほくかへく。方六。まくらをのりくくきた
うわたほろうまたうひてゆくなまくちをのとも。月八。このうれのてのうちよ百くあ
うくううのまうれほろうくまれ。月九。わたほろうくくうてわうちへうのこ
なれ手もこ。月十三。うちくくも陳まのハくくけ。月ふくかせもわほるハふかん
わたほくくく 樹群こ。方四。吉日山ちくくぬうちのかも。千ふいくれほ
ひくにもこうるうのかも。千ふいくれほ
つうなく 要兵東こ。方八。うをの野のねさの吉山 わたほとまる 少こ。方十六。
ひわたほろ昨くもわうをほ山るかも

ふるのきにそひたほれるくろかつらちゆるとなくこゑやつくへせむ。拾玉集

あらしきをいへるそのまゝまてかーらにくーとろくてわほくまくろくと

らて　**たほれつる**　大方之大伝ち振なとゝふこゝろ。万十二たほるといふこゝろ

こひむ〳〵。古今ちるとの枕ゝるからに家所ころかれ

よゝ思ひ　**たほれ迷ふる**。日神代（オホヤシロ）後紀。万七四むをなにもまりてたこ

ちりぬれ　のゝにたけやゝへろくまたけれそる

たほれ　覆ゝ。万十ちるかりかせあるゝりたほれ　**たゝ**　雷のいちしろくし

もゝひむわまかも。日うちのそ花ちりたほれ雪をつゝもてゝ。日ゝる

のつゝのたほひえのゝ。日ゝむくけ　**たゝほる**　所念之万集

たほれをやゝこあけてゝ家ゝ　中たほれ　**たほ**　生ゝ。万三

ちやゝにからあかつゝとたゝしかきぬれゝこゝろたほれ又もまりむゝりたりよ。日十

きひゝてきこゝたほやゝなてゝこゝろたのしとゝもむまちゝる〳〵に。日三つゝまも

にたゝる家きぬゝろちいまゝ　**たほゝの**　御物ゝ。日本紀ゝたゝひゝのゝかに

きたゝていろにいてにけや　えつゝふちゝゝまたゝれほゝものたを

ゝゝ　**たゝゝぬ**　不思ゝ。万四。ゝゝ

けよ　たゝゝぬをたりよ　**たゝほすき**　思慕ゝ。万十三れ

いゝゝ

ゝほゝきこゝつてむやゝ　**たゝ**　思ゝ。万四。ゝのかぶゝちに

。ゝ倭ゝたりゝきゝ　たりゝ。日たりゝをし

。ちほゝ　**たゝゝどち**　思ゝ。万五うめの花いまさかりちりたゝ

ゝゝゝく　ゝちかゝゝしてをいまさうりちり。日八

ゝゝちゝのゝきゝくゝゝたゝゝちゝ　**たゝゝろき**　怜悧ゝ。日本紀

あゝゝゝこゝひゝちけもあゝぬ　やゝゝゝえてゝゝ

ハゝゝたゝゝろきいまきのゝちいちゝゝゆゝに。万十四たりゝろきゝを

きゝろふるゝゝにゝひゝゝたゝゝ　ゝたゝひゝたりゝるゝに。古語拾遺　高御産巣日神

天初時宗倶ちゝん面皆ぬゝ伸ゝゝ　ゝたゝ　ゝ相共ゝ相曰ゝ

ゝ所ゝ家志ゝ古語ゝ之切皆ゝ　**たゝ**　ゝ霊異記（オモシロシ）議

ひやる　遠岡ゝ。万一　たひゝーちまいれ

やゝまゝのたゝきもいまゝゝ　ゝ考像のきゝふたゝ

たゝひあまり　思儒ゝ。万七　たりゝひあまりゝゝをへちゝきまた　**たゝ**

ゝきゝぬひの山ゝちまゝのゝ　山ちまゝのたりゝ

ひゝぐゝれ　思ゝ。万九　ちゝかゝのたりゝひゝれてゝ。日十三　ちゝゝゝたりゝひ

ゝゝれてゝゝ。日十山ゝけ　ゝゝけりゝゝれてひのゝゝ。日十山ゝけ

たりひ
たれて　たよづま　妖し。万三　たよりのわうきてつるまちてとちい　たらひ
。日も　たれらきりたたこよくかもし
て　。日神代　哭声（オラブ）。万九　をけひねらひあー　たろう　愚し。万　十八　たろうろうわまこたこひし
きりーきうしたけひてこ
をふうらのありうのえうり　たろを　下卷し。万廿　ちをつまこみをれろ
えれとあうしけを　ちをやろうぬきいまこきぬし
いをにつ　たどろきて　怒し。万四　をのあひくこりけをれと　たいえ
けこう　ろきてかきさくれをもてをもふきぬい
。万四　高かこ　こ　高かこ　きーをたりれ
りひとのいひくる　ぬ人のわうをもふ　ふろうをるたふ　流のを。日四　こうちくあり
こうこをたりちくこにこ。日十八　ぬ人も　ぬのワーハこもて　祓ひこ。日九　たいつ
くあうここ。　ぬ分こ　流祓はれよつけとりふるはー。万四　石こゃにれいたいてくこくむ
をもこ。日十六　たい人をたうりー車をてかりこー。日十三　たいらく。日十六　たいえ
てぬこ。日十五　ちうこをるたいひくまーこ。和書宮　私記を布流　抜書をふこ
たきなさび　爺進し。万十八　ちを。ふをろこわいをちりぬをちりふをろいまをえ
てーうたきる　こひをむ　伊たきるさひ　ふるくめうかりこりも

けふをうりとうこうも
ちくくちる。霊異記窟窕（サヒ）　たくつる　奥あこたくるたをよつこ。万十七　あうれ
るきこる〜ーあるわつら　たのつま　自ら書こ。万十四　おのつをひのをえたきて
ハーーー

大之笑ゑりとねひうちてゝ

○日サ大ゑめりまいらさけをゝ

たらゝきわちゑゝのゑゝくゝかけゝをゝちゝい

ちうちけゝゝれちかけむよちゝらをゝちゝハ

きくあれゝちゝやひゝの舟まちかぬつ

をやうちをかゝゝてゝうにつゝゝを○日五さんゝけの大ゝやひゝハいまも加ゝ人ちゝの

のゝこのゝゝゝゝゝん○ゝん竹の

大ゝやひゝういゝゝをむゝい

たゝを 母ゝ○又乳母をもいゝ○方土ゝゝりこのゝちゝこう

むゝ○方たゝうのめのゝうけゝ

のゝれゝかゝんをゝ

たゝを 母ゝ○又乳母をもいゝ○方土ゝゝりこのゝちゝこう

ちもゝゝをゝゝゝむちゝみちのめや男ゝれをゝくゝむら

むゝ○日くゝやゝゝゝも光ゝけるかもゝちゝこうゝゝもゝる乳母ゝゆちゝゝゝゝのを○日ゝちん

やゝふゝる祇のゝゝゝゝゝ

やくもにきりてうつ〜〜
こうばこひのやつこい

おがたま 面易し。日本紀汝佐平号不易面来。続紀宣命曰今日乃止雲乃
容世須早至冬〜来止。方言あ〜つのこうわきぬさまつりいとひてむさや
かつきせおかりりせて。日サいませちく〜おめうちかけ。めも通 **おも**

てかちび 面不知。日皇極紀をしやにつきを引いき **おや〜** 祈〜し。方言祈
てや〜人のわかてかちびを。方言八祖書但祈〜三 **おやのこと〜ろ** 。方言おやの子
ころ〜〜気をちをこ。日八祖書但祈〜三 **おやのこと〜ろ** 。方言おやの子
飲楽聴許者い。日久基紀祈〜相新 **おやのちゃ〜び** 日上祈 **おし〜** 老〜
仕伯のちい人のわかのの
さつ〜〜て人のるハい

。方言かゆきハ人ようにく **むな** 嫗し。和嫗花無示老女之称。日敏達紀春日
まえわすをいい 臣仲君女曰老女男夫人い。方言ふりにー
おむるーてやかくたのりえるちつまむたりん **おきろのかゼ** 息吹風紀
ろこと。源氏著 おうるにちるまて
。方言ちゆ山きかちちるちちけ
くおきろの印ゑきりさちる **おつるーら〜** 辰震雨し。方言ハと
きちておつる

うれの面やちてあさうの山のうミちゃむうむ
。日十四つ〜〜ねりつ〜〜そろよおつ〜〜ろ **おほゆき** 大雪し。方言吾国に
ほりりりりりりりりりりりりふ後。日十九 おほゆきふまりおほ
るうゆきちるうろ〜〜ちー。日二おほゆきよう〜〜れてき〜〜れ〜

おほうかし 大伯父し。方言九ちゑのえの **おのし** 霊祇し雨宮の神えし。日
神代伊弉諾尊拔剣斬軻
遇突智ゑ三段二段そゑ三る霊祇又云ゑ神子曰国霊〜。四〜段風土記云球珠
彩球覃村令敏景ゑ一郎有地霊祇謂社国美〜。方言ちうえちのおちうこに云
てふちーめー雪のくた
げーうこにちりけむ **おき** けし。日神代紀 おきはるかへうハ〜れ〜かさね
たつこ乃奥ゑ拾紀てちちつ〜〜ちうれ〜〜〜〜れういき出ら〜。日十あつ〜〜ゑ雨
おきこ〜〜あこいうりおろし〜。日三八やちゑつちのるらハきりちれやー みの川
乃奥ゑのちつろ。日三かくのくにありけるこのを拔 **おほ〜ち** 大路し。方言十九去
名川のたきをふう先てわうたゑ〜〜ー 乃日にそれる
柿をこりをちてこれハ〜やこ乃ちゑれを
おほちハゆきよけとこ乃やまみちハゆきあ〜〜ゑをけて **おほ**

を 大兵し。吉下ろもろくのちろせの山のれほをにいえとけわるてさをにいたる
けりるてれほをにしちすさるわるひつるあくれつくゆるあこやる
こやともあつさうちてりたてりも
のちもろりみるれりひつるあり れほ・のん 大川し。方七いまーくいこあやと
わりひーこーこ せれ大川
さくをけ
こつるかも れほの 大井し。方七をこりり芸の方せをやく れほきう
ひくいやきくくぬかもわりこころやく
このちら 大海之歌し。方六いちし世の方ほの歌と歌ぬの方ちあの方くくと
こもお。日サれほきうこれこちうこふうくれをひてをりす
しくきうたくの屋。日キれほくくこのれくるもうに れほわる 大井し。方一
ゆくわれをいつきまさもしし少しひくこうたと きちうの
さうのちわさうくむともむくくのくくと又 くくとと 美方亦し。音三れくとこに世
さあもむやも。れわの歌とあるあり 祢くり外とに父ハ祢ろ
れほうかと 大伴家し。方一日のとて大伴門はこ日のぬきの大伴門はこ れほうや
ろくもの方れほこかにに新くくれ大うやとにく
大家歌し。方一春宴の祢のうとと乃方歌ハろくくきけともと
。日ろくくきの大うやろ。日六かえるくうに方くやところ れほきくと 大伴門し。日宗祢
れほきくと

うかひてころさんくきらく
をうにひちうひれも れと 大門し。方ろりひのあくの れほむろや 大室
。日祢武死 れさうのれほむろやにひくさいよいをわくもひくくくる わるくいるひ。やくく
きくりをかもこつくくくあのこちらうこいていれうちくやむ れほてら 大
。方四あひれかりぬ人をれのをれちけ れくつき 奥御し。方六大伴乃くほつ祢れや
綿鬼のきりくにぬつくくこと 乃れくつきくるくくれうきくくこる
へく。日九あくやのくちくをくめうれくつきを仕事とえてれのくくくる。日
三かつくくけまくのてこなうれくくつきをくくきけとく。日われくくつくもつけ
むかつくうけまくのてこなうれくくつきくくころ。日むくくころれくも
こくうきくころれくつきくくれくうくれくはけくき仕家山 れほくの 大面し
大とのくくこのをくほかの雪をふしろぬこ。日十三 れほひも 覆ねし。方十天武や
れほのくくきかちくにつもれひてくくちる かかのつくさのれほひ
れけりくくくかてる
くくとかれくくん れほ祢 大根し。和菖れ保祢俗用大根之字根白而食之。日
祢さわさわくちいくをこうちちくくんちくえちんきいるまねくくれ。日つきねくくや
まくろめけこくくはをちくちくれほひぬくろけちくたくむきまくけいこうとてれ

ゝ
ゝい
ゝえ

たはねぐさ　大薗家ゝ。方十四かゝつけりいちゝのぬまのたねくさゝゝられゝ
しゝいゝゝゝうまゝれ。和漢花保井了沁ぬ序者也

たゝひぐち。方十ゝちのゝ乃ゝ馬ゝゝゝ乃ゝりゝくゝいまゝらゝゝのゝゝ
えむ。八宇内物之思至ゝゝ之ゝ西具仁流ゝ。方年月あゝふ

ちゝやゝゝゝ。羽衣夢之物思家或之曜麦之中ゝゝゝ花而宮ゝゝ人ゝゝゝ之思至
ゝゝ作のゝゝゝ乃ゝ乃ゝ山ゝ乃ゝ之ゝ乃ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ作
けゝゝゝゝ。今年方十ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

和歌露分衣

橋本稲彦大人著
加納諸平大人閲

全部五冊

古風より和歌續ゝて小ゝそ四ゝ冊をしいりゝゝゝ長ゝと及哥清忌文ゝ〜出すべく哥文ゝよりて出きゝゝ後へと匡ゝ其の間宮もりねの考證と詳ゝ〜標注ゝい紫の神詠集名歌の抜をゝゝ人伊勢ゝ五雜ゝ抜とおちこれ〜歌ゝゝゝゝ百葉集世一代集源氏物ゝゝゝゝ〜ゝ注解をゝゝゝ出ゝゝれゝゝゝゝゝゝ歌學の便ゝゝゝ

揖取魚彦著

嘉永四辛亥年暮秋日

大阪書肆

南久宝寺町五丁目
伊丹屋善兵衛

本町貳丁目
奈良屋長兵衛

發行書肆

江戸
須原屋茂兵衛
須原屋伊八
山城屋佐兵衛
和泉屋吉兵衛
岡田屋嘉七
英永大助
樂屋東四郎
阪本屋喜市郎
蛭子屋市右エ門
田中屋治右エ助
河内屋喜兵衛
秋田屋太右エ門
奈良屋吉兵衛

名古屋
若山
京都
大阪